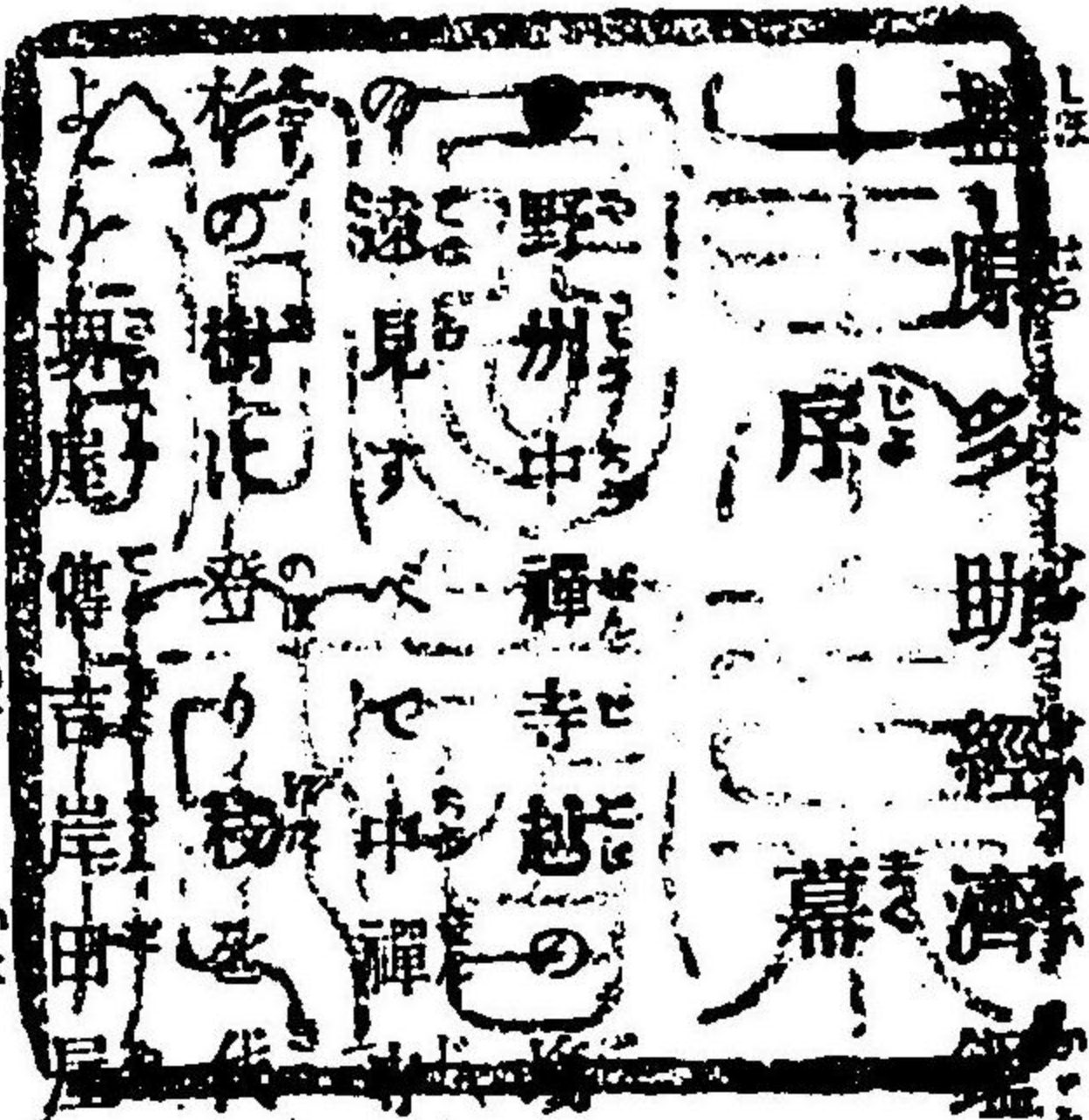


持13

35

No 4648 / 23



竹柴諺藏



あり 被成ませ (傳) 夫の有難うト 兩人辨當を出して喰ふこな
 があふるなら少許戴けませんかな (角右衛門) サア、
 の上に柳道其ど土瓶の有るに目をつけ (傳) モシ 柳の衆茶
 ませうト言ながら草臥しこなしにて木の傍へ出て来り
 水音のする所へ出来た (傳) マア此木蔭で一休み致し
 来り (傳) 吉咽が渴いて卵之助旅商人の扮装一本差にて出で
 野州中禪寺越の遠見すべで中禪寺越の越山中の体こゝに
 杉の大樹山また山

し此内下手より角右衛門女房か清世話女房の持へにて飯櫃を提げ薬籠を提し子役多助の手を曳出て來り外之助と顔見合せ兩人喫驚せしこなし有て (卯)チー誠貴女は (お清)然ういふ和女 (卯)右内でムりまするは新造様か懐しふムります (清)且那祿右内が參つて居ります (角)ナニ右内が參つたとな (卯)時に傳吉さん儀は愛を少し談がめる程に足下は一足先へ往て下さらぬか (傳)そんなら沼田の大竹屋で待とせうト傳吉は下手へ這入此の内角右衛門は下て來り思入有て (角)久し振にて和主に會ひ何から事を尋ねんやら如何致して此様な處へは參つたのぢや (卯)サア私よりは貴公さま何うしてマア此様な山の中にか在なさるのでムり升る (角)サア今更申すも便なけれどト合方に成り思入有て拙者派人致してより寄邊なさまと據

なくも家來惣助が故郷たる是より二里程麗なる小川村と申す處へ聊の田地を購め農業なして暮す内四ヶ年以前の秋の頃山崩れの出水の爲め田地さへ押流されて限跡なく夫より後は據なくも秋は樵に冬は獵人其日を送る瘦世帯 (清)夫に就ても氣にかゝる妹は壯健で居るかいのうト兩人こなし有て云ふ卯之助面目なき思入あつて (卯)八年以前お妹御と不圖した事から不義密通果はお郎を失踪てお榮と申す娘を儲け目下は本郷春木町に眞の幽な旅商人仄に聞けば此の邊にお住居なさると承まりりモシお目に掛れやうかと商賣片手に來て見れば如何に時世と云ひながら此峠深い山中に杣樵夫のお活業とは實に泪が溢れまする○ンテ夫なる坊ちやんは (清)和主が家出をする前に分嫉したる多助ぢやわいなア (卯)オ、坊ッちやんでムりは

したかト宜敷こなし角右衛門思入あつて俸に附けて思ひ
出す當時宇都の宮の城主なる戸田侯の番士にて野澤源作
といふ者より身の落着を計らへば急ぎ参れど數度の招き
我は二君に仕へすとも責て俸の多助をば世に出さんと
へども身支度さへも調ひを爰に五十兩の金あれば大小帶
せし武士に成る可き機運はありながら夫も思ふに任せぬ
とはよく／＼弓矢八幡に見放されし此身の上トこなしの
つて云ふ(卯)イヤお案じなされませう其五十兩は小生が
屹度調達致しませう(清)そんなら和主が金子をば(卯)假
令身を粉に碎けばとて以前の不埒のお詫の爲〇併し只今
と申しては出来にくふはムりませうと宅へ飯つてお尋と
る相談なし屹度來年二月までに必らお持ち参りませう
(角)夫は急いで急がぬこと下是より盛詞色々あつて責て久

々の對面なれば芽屋ながら我家へ伴ひ村酒でも酌かひし
夜と共に往事を語らんと止めるを卯之助の連が待合して
居ればと辞退をなしド、訣れを告げて下手へ這入る跡に
角右衛門思入有て(角)モウ今日は是限りにて仕事を廢め
氣晴しの爲め獵を致さうト斧を把て肩に掛るお清は辨當
を持って立上る是を見合て双方同時に道具替りの知らせ此摸
様宜しく樵唄にて道具ふん廻す
●大原村茶店の場 本舞臺總て田舎茶見世の道具宜し
く爰にお市胡麻鹽かづら婆々の拵へにて草鞋を作つて居
る俵に作男三人菘を映居る此摸様在郷唄にて幕明くと臺
詞皆々へ渡り三人は上手へ這入是と引違へて以前の卯之
助出て來り思案のこなし有て(卯)最前斯如云ふて請合た
もの、其日暮しの旅商人何うして五十兩の金の工面が出

来やう筈はなし〇エ、任他又女房とも相談したら何うな
 と何ろか〇何じや知らぬが心持が悪いモシく茶店の酒が
 あるなら一本爛て下され (市)ハイくトお市は徳利を土釜
 の中へ浸る此内花道より百姓鹽原角右衛門出て来り豪詞
 あつて舞臺へ来り (百角)媼さん例も健康で結構ぢやのシ
 テ内に爺さんは居やんぞか (市)ハイ内にてがんと此時奥
 より九兵衛出て来り (九)角右衛門様良馬があるが沽ては
 呉ませぬかの (百角)馬なら結構ぢやシテ何歳位ぢや (九)
 何歳といつて三歳六ヶ月に成るマア見せるから待て下せ
 へト言ながら上手の馬小家より馬を曳き出て来る角右衛
 門色よく視ることあつて (百角)成程良馬だ沽てへが幾許
 だ (九)旦那の事だから五兩五粒さ (百角)高價が然し買ふ
 と仕様乃で今日は戸海村まで田地の取引に行くのだが先

の都合で歸りに直と買て行かう先づ一寸手附を置かうト
 胴巻より金包を出し其内より一兩出して九兵衛に渡す外
 之助は此の金包を見て美しき思入あつて氣をかへ酒をグ
 イと呑み (卵)エ、儘に成らぬが浮世の中 (市)モシ飯は麥
 だが宜しいかな (卵)イヤ飯ではムらぬト是より色々盤詞
 あつて角右衛門は上手へ這入卵之助は始終跡を目送居て
 寧ろといふ思入にて (卵)ソレと行かけるをお市喚驚して
 止め (市)モシ客人ト一本差の鎧を捉へる是にて卵之助胸
 くりするを道具替りの知らせ (市)酒の錢を (卵)オ、と心
 付き氣の急くなしにて錢を出して拂ふお市は合點の往
 ぬこなし此模様早めたる合方にて道具ふん廻す
 ●逢貝村山道の場 本舞臺都て山道入り口の道具水の
 音 山嵐にて道具纏るト花道より以前の百姓角右衛門出

来り登詞あつて本舞臺へ来る此時向ふ戸家の内にてオ
 ・ノト言ながら以前の卯之助走り出て来り旦那様頼
 みがムりまする(百角)何ぢや知ぬが僕を見て頼みど
 (卯)外でもムりませぬ小生の主人が浪人なし小川村に居
 りまするが五十兩の金さへあれば以前の武士に成れる
 何卒お持合せの五十兩お貸なされて下さりませ来年の二
 月迄には乾度返済を致しますれば決して御損は掛ませぬ
 トこなし有て云ふ角右衛門扱はといふ思入あつて(百角)
 却々僕は金を持って居るやうな者とは違ひまする是は他人
 の預り物先屈る小生は使はせよ種々登詞あつてド、
 卯之助は嚇の爲一本差を抜く是を見て角右衛門驚愕なし
 (百角)人殺しやーイと上手へ逃て這入卯内も跡を追て上
 手へ這入る此道具柄なしにてふん廻す

●本舞臺都て敷阪峠谷間の摸様 山嵐バタ／＼にて道
 具納まるド爰に角右衛門卯之助兩人掴み合の立廻り宜敷
 あつてド、角右衛門躓さ仕れる卯之助上へ乗りかかり
 (卯)サア旦那金を貸て下さりませト刀を胸元へ差附ながら
 頼むを角右衛門肯聴こなし有て(百角)人殺しやーイと桃
 み合て居る此時上手の岩山の上へ子役の獵師盤原角右衛
 門出て来り鐵砲を構へて火蓋を切る是にて本鉄砲の音し
 て卯之助は撃れたる動作提刀に虚空を掴み苦しみながら
 含み紅を吐き倒れる是にて本釣鐘を打込み後の山道を廻
 つて以前の獵師角右衛門鐵砲を提げ出て来り(獵角)旅人
 怪我は無ツたか(百角)ハイお庇護さまで助かりました
 (獵角)シテ撃殺し盜賊は(百角)此所に死ばつて居りますわ
 へ(獵角)ドレと言ながら死骸を視て恟くりなし(獵角)ヤ

ハコリヤ右内 (百角) そんなら此人は (獵角) 拙者が家來
 (百角) エ、——と恟くりして震ゆる獵師角右衛門もこな
 し有て死骸を抱き起し、コリヤ右内氣を儘に持てト卯之助
 を介抱する事あつて (獵角) 心得道を致したなアト是にて
 卯之助苦痛を堪へし動作にて篠入りの合方に成り最前受
 合し身支度金の五十兩ト是より色くせりふ有てト御主
 人のお手に懼り死るはまだしも此身の本望ト此臺詞の内
 だんく弱るこなしにてナ、南無ト掌を合しがつくり落
 命兩人愁ひのこなし宜しくド、鐵砲にて死骸を擔ぎ上る
 是を知らせにて淺黄幕を冠せる○跡山風にてつなき後の
 道具出來次第切て落す
 ●獵師角右衛門内の場 本舞臺都て獵師住家の道具爰
 に獵師角右衛門百姓角右衛門女房お清子役多助住居卯之

助の吹替の死骸を布團の中へ入れ屏風を立て此見得宜し
 く合方にて道具納まるト臺詞皆くへ渡り思入あつて (百
 角) 然し貴公も以前に武士と聞きましたか定めて由あるお
 身でムりませう (獵角) オ、寔お悲歎に取紛れまだ名乗り
 む仕らぬが拙者事は鹽原角右衛門と申す浪士でムりませ
 る (百角) 小生こそは鹽原角右衛門といふ農夫でムりませ
 (獵角) イエサ拙者が鹽原角右衛門 (百角) 小生も鹽原角右
 衛門 (清) ア、モウシ姓といひ名前まで同じ事とは心得す
 モシ長夫先祖の由緒を被仰りませいなア (獵角) ソリヤ其
 方が申さいでも此方より申す所拙者先祖は下野國鹽原郡
 鹽谷村の郷士鹽原角右衛門と申すトが書類に確に遺りあ
 り (清) シテ又貴客の御先祖は (百角) サア小生の先祖も鹽
 谷村の郷士なれば原を洗へば血統は一系 (獵角) 不思議な

事とて武士に (百角) 此方ハ鐵把る農夫と (獵角) 異れど同
 じ血筋の家柄ト皆く感心のこなし有て百姓角右衛門以前
 の胴巻の金を出し (百角) 爰に持合せた五十兩是を身支度
 金としてト差出すを押返し (獵角) 何故金子を頂戴致す
 (清) 況て一面不識の貴客に (百角) 夫れでは死だ右内殿が犬
 死に成りませう (獵角) であらうとも此金ばかりは (百角)
 然らば貴重の代呂物をお售被成て下さりませ (獵角) 其代
 呂物と仰せあるは (百角) 夫婦が中の御子息をばト是にて
 兩人エハと恟くりなし今日右内に五十兩の金策を頼みし
 む悻多助を世に出したるの事なれば此義承諾がたしと聞
 入ぬを (百角) 彼程までも主人の爲に心を盡せし右内殿の
 遺骸をば此地に埋め置き夫婦諸其他國に立退き何人あつ
 て吊はん幸ひ我家は此處よりは程近ければ五十過て子な

さを幸ひ多助を養子に貰ひ受此忠僕の問ひ吊ひをさせた
 しと此筋の臺詞ある是にて獵角思入あつて (獵角) イヤ御
 道理差上げませう (清) モウシ長夫多助をお遣遊ばしては
 (獵角) ハテ余に所存がある○多助爰へ来いと是より多助
 に養子に行けと言聞し後日の教訓をする長臺詞色々ある
 此以前より惡漢權六門口にて内の様子伺ひ居て (權六)
 ヤア爰の角右衛門は人殺し此通りをムハ然うだト言なが
 ら一散に向へ走り遣入る獵師角右衛門こなし有て日頃よ
 りして惡たれ者の彼權六諸人の爲めなり我身の爲めト鉄
 砲に彈丸込するお清百姓の角右衛門是を止るを振拂ひ門
 口にて片手だめしに發砲す是にて本鉄砲の音して向ふ戸
 家の内に (權) ツア、、 (獵角) 慥に手應ト鉄砲を下に突
 くを木の頭多助は恟くりしてお清に抱付く此仕組宜敷替

つた合方にて柏子幕
 ●序切 中仙道鴻の巢驛田本の場 都て支度屋表掛り
 の道具床元を澤山に列べ掛念佛法螺貝にて幕あくと爰に
 明手総出にて首に珠敷を掛けし妙義山参りの仕出し大勢
 床几へ腰をかけ飯を喰て居るを下女三人にて給仕をして
 居る此人數の内又旅のお覺道連の小平紛れ込で居て仕
 出しの烟管烟草入などを扱て居る傍に金八松五郎源三駕
 昇の拵へにて盗品をほかして居る先達五郎兵衛彼方此方
 と捨せりふにて幹施をして居る此内向ふより郊之助女房
 お龜子役の娘お榮の手を曳き出で来る是を見て三人の駕
 夫花道へ行き無理に駕を勤めるお龜迷戯なるこなしにて
 斷りながら本舞臺へ来るお覺小平星を見て駕昇を拂ひ床
 凡に掛さすこと有て (覺)見れば娘達を伴て同行とてもな

い様子シテ貴女は何處へか出被成のでもムります (龜)ハ
 イ妾は上州の小川村まで良夫を尋ねて参るものでムりま
 する (覺)夫は恰是幸ひ吾儕も其邊へ参りますれば御同道
 いたし今夜は伊勢崎の錢屋宿りとしたら何うでムりませ
 う (龜)それは何より有難い事でムいますト此時子役前へ
 出で (お榮)か、さん私しやお腹が空たわいなア (龜)オ、
 然うであるく、而が今はお客が込合て居る程に要時の間
 待て居や (榮)それでもお腹が透て成ぬわいなア (覺)オ、
 可愛さうにお子達だもの爰に伯母のがまだ箸もつけずに
 在る程に是を上げませうから此處へお出トお覺色々子役
 を可愛がる事あつて飯を喫して居る (小平)オィ姐さん大
 急ぎで一人前持て来てかくれ (下女)ハイ畏りましたト下
 女は膳部を持って出る是にて皆々食事を仕まひ駕を雇ひ

覺子供を抱へ駕籠に乗せ (覺)モシかかみさん纏に此兒を
 貸て下さいヨ (龜)夫では何うも恐れ入ります (覺)何のあ
 なた其遠慮サア 行ませう (小)勘定は此處に置せト小
 平先に駕二挺隨て上手へ這入る跡に五郎兵衛は皆々をせ
 り立法螺貝を吹を道具替りの知らせ (下女)何卒お歸りを
 お願ひ申しますト此仕組宜しく掛念俤にて道具ふん廻す
 ●保泉村お龜危難の境 舞臺一面樹木の植込濡色を見
 せ惣て雨中の模様雨車雷の音にて道具納ると向ふより源
 三松五郎駕を擔ぎ直に本舞臺へ來り (源三)へいお約束の所
 迄參りやした (松)お浮雲ムりますせト駕の垂を上る爰に
 お龜四下を見廻し不審のこなし有て (龜)さうしてお伴の
 乗や子供はまだ參りませぬかいなア (源)何うして如此所
 へ來るものか (龜)夫ハ又どういふ理由で (松)詳も糸瓜も

あるものか餘まり餓鬼が可愛らしいから兩個の者が拐掣
 したのだ (源)まだ夫ばかりか手前でも色氣の乗た中年増
 此兩個が慰んで (松)跡は極まりの旅女郎賣て二人が切半
 ヨ (龜)エ、と胸くりなしソリヤ斯うしてはト逃げにか
 るを松源頓挫と捉て押へ猿轡をはまし引倒す爰へ百姓の
 角右衛門出て來り兩人を投退け一寸立廻りあつてト、駕
 昇は下手へ逃て這入角右衛門のお龜の猿轡を除し (角)コ
 レ女中怪我はないか (龜)ハイ何處も怪我ハムりませぬが
 一人の娘を勾引され長夫に會す顔もムりませぬ (角)シテ
 和女は何處のお人じや (龜)ハイ妾は江戸本郷春木町にて
 旅商人を致します岸田屋外之助と申す者の女房でムり
 ます (角)エ、そんなら和女は鹽原角右衛門殿の妹御で
 右内さんのお内儀か (角)其長夫の歸宅が餘り遅い故遣々

尋ねて来たものでムリまするが長夫の居所を御存知なら
 何卒逢して下さりませ (角)逢しては進めるが必らぞ喚驚
 せまいぞやト懐中の紙入より紙片を出しサア是が長夫ぢ
 や逢ッしやれ (龜)エ、何長夫が此の書附ト見る事あつて
 ナニ徹殿忠操信士エ、、ト悔りなし〇そんなら長夫
 は死だのでムリまするか (角)オ、然も去年九月二日戸海
 村へ行く途中ト是より前幕の頼末を詳しく語ることあつ
 て家來と知せに撃たのハ和女の兄御の角右衛門殿 (龜)エ
 、 (角)それから段々名乗り合息子の多助を貰ひ受結納代
 りの五十兩夫で身形を調べて江戸へ出立しられたわい
 (龜)聞けば聞くはと不仕合せ長夫には死別れ獨の娘は勾引
 され兄の江戸へ出立とは生存甲斐のない此身の上事その
 ことにト思入あつて行かけるを (角)コレ女中早まるまい

儀の家には現在の和女の甥の多助も居れば江戸へ往れた
 角右衛門殿や勾引された娘御の手掛りも出来る故鬼も角
 も小生の宅まで來さつしやれ (龜)段々どの御親切其お詞
 にあまへましてト是を雨車に成り角右衛門空を見上げ
 (角)エ、又隆つて來た〇サア女中行ませう (龜)ハイとお龜
 立たうとして起れぬこなし角右衛門抱き起す爰へ以前の
 駕昇二人伺ひ出で來りウスと胸ぐらを捉るを振拂つて一
 寸立廻り (角)今の手に際ト振伏るを木の頭懲ねへのかト
 押へ附るお龜ハ角右衛門の後に縫り居る此模様賑なる詔
 らへの鳴物に雨車を冠せ拍子幕

● 百姓角右衛門住居の場 都て百姓家門外の道具宜し

貳幕目

く爰に分家太左衛門の娘おさく下女おため作男重太夫立
ち懸かり在郷頃にて幕明く (お作) そんなら多助さんは愈
く留守でがんですかいなア (重) サア今日の江戸から親且那
がお歸り故沼田の樺鼻まで迎ひに出やしやッたのでが
す (作) そんなら戻らしやんす迄伯母さんに三味線を渡へ
て貫はふわいなアト門の中へ這入る引違へて作男源太兵
衛出て来り (重) サ、源太兵衛が分家の娘が宅の若旦那に
大層ムツて居るぞ (源) 馬鹿こくな夫は然うど今度の女房
の村の娘に三味線を教へたりあんどして百姓の女房には
向ぬぢやないか (重) サア夫も若旦那に實の伯母なり種
く入組だ譯があつて分家を初め村一同から後妻になはし
た女房さんだ三味線も陽氣でよいわいと色々臺詞あつて
重太夫の下手へ這入此内向ふより前幕の角右衛門下男五

入旅形りにて出て来る跡より戸家の内にて (多助) オ、イ
阿父待てくんさいト多助白馬を曳出て来る此馬に引手
茶屋の娘お梅怖さうに乗て居る (角) 右衛門 (多助) 呼んたの
は何ぞ用か (多助) 此娘が恠いといふて泣さうに成て居る
のでがんです (五) 八モウ向ふが旦那の宅じや幸抱なせへま
しとせりふ有て舞臺へ来る (源) オ、旦那唯今お歸でござ
へましたか (角) オ、今戻りましたト 此内多助はお梅を
馬より下してやる源太兵衛是を見て (源) 旦那其娘ッ子は
何處から伴て戻つたのでがんです (五) 是は江戸の火事で拾
ッて来たのぢや (源) ヒヨ——江戸の火事には好むのが
落て居るのうト臺詞皆くへ渡つて皆々門の内へ這入直に
門の内よりお作お爲出で来り (作) 今の娘は何であらう
(爲) 彼はテッキリ多助さんの嫁さんに違ないト色々合點の

行ぬこなし此内向ふより以前の道遠小平道樂者旅形跡よ
 り又旅のお覺胡麻鹽かづら婆の控らへにて小平を呼び
 ながら出で來り(お覺)オイ悴またねへか些ッとは老人の
 足にも附合て吳るがい(小平)馬鹿を言なさんな附合た
 ばつかりに到頭本人を見失ッちまつたト臺詞あつて舞臺
 へ來り作爲を見て(覺)モシ姉さん今爰へ馬に乗た娘が來
 た筈だが何處の内へ這入たかお知でないか(爲)其娘なら
 此お内へ(覺)そんなら娘は此の家へ(爲)夫故心配して居
 るのでがんと捨せりふにて兩人花道へ這入小平思入あ
 つて(小)オイ阿母此門構へちや随分金に成るせ(覺)知れ
 た事だ(小)だが何う話を持込(覺)耳を貸な(小)よし來
 たト菅笠を把て肩へ掛るを道具替りの知らせ兩人下に踏
 りて叫く此模様を在郷唄にて道具ふん廻す

●角右衛門内座敷の場 都て座敷の道具宜しく中央に
 以前の角右衛門上手に前幕のお龜百姓女房の拵らへ傍に
 以前の梅下手に多助皆く愁ひの摸縁合方にて道具とま
 るトお龜こなし有て(龜)餘りの悦しさに聞たい事も聞な
 んだが和女(梅)今日迄何うして居やつたトお梅涙を拭ひこ
 なし有て(梅)扱撃された其時はまだ年齢さへも七歳にて
 詳しい事は知ぬ共養なはれし親といふは女ながらも又旅
 と異名にとつた悪者にて近頃三田の三角へ引手茶屋の嫁
 業を初め旦那をとれの藝者になれのと無理難題の折檻に
 身に生疵の堪がたない義理ある兄の無理口説悲い歳月を
 消光うち此四日の江戸の大火赤阪から品川迄焼通つたる
 火災に罹り養母さんから預られた着類の包を途で盗まれ
 分疏なさに覺悟を極め本所のお竹藏の大清へ身を投やう

とした所救助られたのは實の親阿母お前の良人とは妾し
 や夢のやうでムんしたわいなア (角)サア夫が縁は不思議
 なもの此娘を助けてりら親御を尋ねて渡さうと三日が間
 駆廻つては見たれども江戸四里四方の燒原にて皆くれ行
 衛の知もせせ身の上話の緒から血筋の縁が分つて来て連
 て歸つた你女の娘ト色くぜりふあつて夫に就てありやあ
 龜相談が有のじやがトこなし有て多助も今年廿歳になれ
 ば其娘も恰是十九に成り此兩個の從兄妹同士何と今から
 夫婦にして此財産を譲つたら何うであらう (龜)夫はマア
 宜ういふて下さんした然うなる上は猶く母が身の喜び
 (角)コレ多助和主此娘を嫁に娶氣はないか (多)サア先さへ
 女房に成らうと云ふなら (角)娶か (多)ハイ (龜)娘お前は
 (梅)サア貴君さへ女房にして遣らうと被仰るなら (龜)お前

ふ成りか (梅)ハイト兩人羞かしきこなしお龜角右衛門
 を見合せ (角)目出度是で本極りじや (角)龜)アハ、ハ、ハ、
 ト此時奥より以前の五八出で来り (五八)旦那様は
 逢てへつて人が見ぬてがんと (角)何の用か多助往て聞て
 来い (多)ハイト多助奥へ這入 (角)コレ五八今日からは此
 娘を以前のお榮と改ためて内祝言をする心算じや (五)夫
 は何より目出度うがんと併し江戸の育ちなら百姓業は分
 るめへ夫は儂が教へますべい (梅)軟弱躰で出来ますこと
 なら (五)何の江戸の火事よりは餘ッ程樂でがんと (角)其
 火事が出雲の神じやとて倍氣は〇ト洒を噉り込を道具替
 りの知らせ成ないぞ (龜)サホ、ハ、ハ、ト此摸標浮た合方
 にて道具ふん廻す
 ●同玄關先の場 惣て百姓家玄關先の道具爰に多助小

平お覺おや、言争ふて居る此見得合方にて道具納る
 (小)夫じやア馬に乗せて這入た女は爰の娘に違ひねへとい
 ふのだな (多)然うでがんす (小)匿せるなら隠すがい、是
 から名主へ擔ぎ出し勾引の罪に落すヨ (多)何で勾引でが
 んす (覺)何引たら拐帶と云ふのだ (多)何日假がそんな事
 をト立懸るを小平隔て (小)ヤイ百姓大間拔乃公のお袋に
 指でも觸ると肯聽ぞト立懸で居る爰へ奥より角右衛門出
 て來り (角)多助一体何うしたのだ (小)他人の娘を斷りな
 しに連れて來た其理由が聞たいのだ (角)夫の身投をする
 のを助けて親を捜したが知ぬ故娘にして連れて戻つた (小)
 親が知なさやア名主もあれば自身番もあることだ人の娘
 を一晚でも泊て見れば紙を附たどしか思われねエ (角)そ
 んなら何うしたら宜いのでムります (小)三百兩よこすがい

、(角)金は出さうが彼の娘は十三年前鴻の巢を勾引され
 た娘だが夫を何うして子にしたか夫が先へ聽ませう
 (小)覺エ、ト愕然思入此の時奥よりお龜お梅の手を引き出
 て來る (小)覺是を視て愕驚のこなし (梅)お前方遠い所を
 ようお出たね (小)おさやアがれ是もみんな汝の故だ (覺)
 親不孝のふんばり阿魔めト立懸るを留て (龜)エ、深山さ
 うに親不孝と誰に沙汰してお前の娘になさんした (小)
 覺)ヤ、(兩)サア斯う實親が知れて見れば娘は今から返し
 て貰ひませう (小)返せと言たて唯じやア返されねへ (角)
 そんなら五兩の金を上げませうから娘を返したといふ書
 附けを書ッしやれ (小)五兩ばかりの朽金で歸れるものか
 (多)歸られれば阿父出る所へ出て貰わう (小)エ、汝には
 言ねへ引込で居やアがれヤイ母ア彼是言ちやア面倒だ大

負に負けて歸んねへト臺詞色くあつて五兩の金を受取る
奥より五八両函を持って出る是にて書附を書き兩人捨せり
ふにて花道へ這入跡に皆くこなし有つて (他)他人の娘を
勾引し (角)金を強談て行うとは (多)阿父さんト向ふへ思
入あつて身震ひするを木の頭あつかねエ敷でがんすなア
ト此摸樣宜敷詠らへの合方にて柏子幕

三幕目

●地蔵繩手雨舎りの場 本舞臺中央に大なる石の立地
藏松の大樹都て地藏繩手の道具爰に多助お龜お榮五八兩
舎どりをして居る此の摸樣大雨電光雷の音にて幕あくと
寺参りの途中俄か雨に遭ひ寺へ引き返へして傘を借に行
くといふ臺詞互つて五八は下手へ這入る跡段々に雨の音



烈敷なり三人こなし有て爰に濡て居やうより三本榎の茶
 店まで走らうと捨せりふにて行かゝる此時下手より前幕
 の小平着流し煩冠り尻寒げにて出で來たり (小平) オイオ
 イ待ねへ (多助) 吾儕に待と言ッしやるの (小) お梅よく人
 を馬鹿にしやアがつたなアト類冠りを取る三人見て恠く
 りせし動作 (小) 此間の返報を仕ねへ間は江戸へ歸らぬ腹
 を据ゑ機会を覘つて居る内に死去た舅が三十五日の寺參
 りに出たを幸ひ今日こそと歸りを待た道速小平〇ヤイ次
 立此阿魔だ爰へ來いと橋懸りより次立仁助成落戸の拵へ
 にて出で來り (仁助) 夫ぢやア兄實此阿魔か (小) 然うだ腹
 いせに引浚ひ女郎にでも叩き賣にやア埋草が出来ぬへの
 だヤイ仁助吾は女を攫ふから汝は野郎を撲さしめろ (仁)
 合點だト小平仁助三人を捉へて散く打擲なしお榮を引攫

へて行かんとする掴み合の立廻り宜しく此内向ふより原
 丹治同丹三郎春割羽織大の旅形にて足早に出で来り小仁
 を懲し(丹三郎)拙者が顔を存じおらうト笠を取る小平見
 て恠くりなし(小)違へぬへよく吾儕の家へ遊びに来た
 (榮)原さんでムんしたか(多)そんならお榮此お方は(榮)引
 手茶屋をして居る時お馴染のお客様(丹)夫は悴油断が成
 ぬな(丹三)實に父上の前にて言にくひ事ながら江戸番
 の其内に明友に誘はれ折く参つて知つて居る其奴は其家
 の悴にて小平と申す護摩の灰(小)何だ乃公を灰だ(丹三)
 ぐづぐづ申さば手討に致すぞ(小)飽棒め足があらアト雨
 人下手へ逃げて這入お籠こなし有て(龜)危い難儀を助か
 りしお禮と言は失禮ながらお近附のその爲に何所ぞで
 寸ナア一口(多)何うぞ然うして下せへまし然し儂は元村

へ約束の小麥をば送らねばならぬへから是でお別れ申し
 ませう(榮)夫で雨の歌だ間(龜)失禮ながら且那様(多)
 吾も其處までお供をばト臺詞のつて皆く上手へ這入と下
 手より小平仁助出で来り(仁)助兄貴骨折代は何うして呉
 る(小平)仕事も仕ねへで骨折代が出せるかエト爰へ上手
 より五八大きに遅うなりましたト出て来るを小平見て胸
 ぐらをみる(五)コレ乃公を向うするのぢや(小)坊主が僧
 けりや袈裟迄だト天窓を撲はす仁助は足で蹴る五八は傘
 にて打て掛る小平身を轉して傘を押へる是を雨車に成り
 (仁)兄貴又降つて来たせ(小)夫は恰是幸はひだト傘を引
 奪る(五)コリヤ寺から借て来たのぢや(小)エ、喧器いお
 へト傘を開くを木の頭サア出かけベエト上手へ行かける
 此模様禪の勤雨車にて道具ふん廻す

●小竹屋座敷の場 都て料理屋座敷の道具宜しく爰に
 以前の丹治丹三郎お龜お榮貸浴衣形にて酒を呑居る此見
 得宿場の騒ぎ唄にて道具留るとお榮こなし有て原さん實
 に久しふりで貴郎のお酌を致しまするわいなア (丹三郎)
 是も時の災難であらう (榮)アレ其様な憎らしい事をト丹
 三郎こなし有て阿父さん暫く御免 (丹)何處へ参る (丹三)
 一寸憚り (龜)お手水でムりまするかコソお榮やお前
 申してお出 (榮)アイと兩人起て奥へ這入跡にお龜丹次思
 入有てなまめまし臺詞に成り騒ぎ唄にて此道具ふん廻す
 ●同奥座敷の場 都て小竹屋奥座敷の体騒ぎ唄にて道
 具納まる爰にお榮丹三郎こなし有て (丹三)かうお梅さん
 ではない目下ではお榮さんと名を替たと云ふ事だが其名
 前は兎も角も引手茶屋を仕て居る時分手の一ツ位は握ら

したことも有たらう今は亭主を持たとてそんなに怕い毛
 虫に觸る様になくとも (榮)アソ又そんな嫌味な事を好
 き好で持た亭主で有まいし此間死去つた阿母さんの連
 合が斯うせいと言れますから女房に成た妾の躰夫でなく
 ば何のマア彼の土臭い男をば (丹三)エ、味く言ッて居る
 せ (榮)夫でも妾とは從兄妹でムりますもの (丹三)夫そ
 從兄妹同士が鴨の味好どころが在はこそ (榮)原さんたん
 どいちめて下さりませ世の義理がないならば妾ぢやとて
 此世に生れた女ぢやもの思ふ儘に成たなら他に亭主に持
 たいお人が (丹三)他に持たい亭主とは夫は一体誰れだた
 れだ (榮)誰でも宜しうムります (丹三)イヤ宜しいでい
 されぬ長夫があつて他に持たい亭主があるとは不届千萬
 不埒な女だ幸ひ爰に茶の間があれば其詮議を致さにか成

ぬサアお榮さん一緒にお出(榮)夫でも阿母さんに知れま
 したら(丹三)ハテ来など云ふにトム榮の手を把り内へ這
 入直お丹治お龜酒に酔て居るこなしにて出て来り手水鉢
 にて手を拭ひながら下手の聲が耳に入りし思入あつて扱
 足にて出で来り横手の下地窓より内を覗き視て恠くりな
 し(龜)モシ旦那(丹)エ、恠りした何う致した(龜)何うと
 いふて大變が出来ました一寸来て御覽なされませト丹治
 を連れて来て覗かす丹治内を見て恠くりなし(丹)是は怪
 しからん(龜)旦那何うしませう(丹)何うと言つて相手は
 良人ある他人の女房トお龜思入あつてモウ斯うなつた上
 からは貴君の若旦那を娘の筆に下さりませ(丹)テモ娘に
 は多助といふ(龜)サテ亭主の有る身ではムりませぬ成
 らう事なら娘の好た男をば亭主に持してやりたいも娘と

夫婦になしたら卿と妾のその中もナアモシ旦那(丹)ソリ
 ヤ都合は能けれど亭主のある女の所へ筆養子にも参ら
 れまい(龜)サア其所が貴卿へ御相談若是が知れたなら村
 の者が一致して竹鎗でも持出す時は娘ばかりか御息ま
 で身に係はる大事故然も内には何と旦那多助をば(丹)
 人知れぬ殺害は後日の災を斷つ道理シテ多助が歸りの道
 筋は(龜)一筋細手の庚申塚(丹)然らば時刻の遅れぬ内
 (龜)よい吉左右を(丹)オ、と言ながらツカくと花道へ行
 傘を開くを道具替りの知らせ待て居やれト雨雷の音烈し
 く花道へ這入る此鳴物にて道具ふん廻す
 ●元村道松原の場後黒幕松原の体木魚入の相方雨雷
 の音にて道具留るト西の通ひ道より多助馬を曳出で来り
 臺詞あつて中の通ひ道へ懸ると引さる馬は動かぬこなし

愛へ百姓圓治郎御膳を擔ぎ出で來り其處に居るのは誰だ
 (多)多助でがんす (圓)多助どん何をして居るのだ (多)青
 が動かぬへで困つて居るのだ (圓)青をうした其處に居て
 は往來が出來ねへト圓治郎が引と馬歩行さ出して花道へ
 行く多助が曳と馬又動かを圓治郎が曳と馬動くなし色
 づあつてト、多助は圓治郎の荷を擔ぎ圓治郎の馬を引さ
 上手へ這入ると松原を上下へ引取り黒幕を切て落す
 ●庚申塚暗殺の場 都て庚申塚凄みの道具やはり右の
 鳴物にて道具納まると上手より多助出で來り何處で道が
 違ふたかナイ圓治郎どんト言ながら花道へ這入る直に
 上手より圓治郎馬を曳出で來り多助どんは何を仕て居る
 か些と此處で待合して行べいと立停る此時稻叢の蔭より
 原丹治出で來り春後より笠越に圓治郎の頭へ切附る笠仕

掛にて兩個に裂け血潮流れ圓治郎苦痛の動作あつて馬の
 手綱を放しぱつたり落入る馬は橋懸りへ飛ではいる丹治
 の四下を見廻し死骸に跨がり止を刺すを道具替りの知ら
 せ此仕組本雷雨の音稻光にて道具廻す
 ●下新田鹽原住居門外の場 都て二幕目門外の道具此
 に以前の馬イみ居るやはり右の鳴物にて幕明くと花道よ
 り多助御膳籠を擔ぎ出で來り圓治郎んは何う仕たしらん
 ト言ながら舞臺へ來り馬を見てナ、青汝獨り爰へ來て圓
 治どんは何うした彼の男も分らねへ馬を如此とろに棄
 て置いて尙逃げたら何うする目算だト此時門の内より五八
 根灯を提げ出で來り多助を見て若旦那今か歸りでがんす
 か (多)ナ、五八か庚申塚の手前へ來て吾が曳と馬が一步
 む動かねへから圓治郎んに曳て貫つて今爰へ戻つて見れ

ば青ばかり爰に居て圓治とんが居ねへのは宅へ歸つたの
 で有うから汝此荷を屈てやつて呉れ (五)此降のに邪魔な
 こんだなアト五八の荷を擔ぎ下手へ這入る多助の馬を曳
 て門の内へ這入る是にて道具ふん廻す
 ●鹽原内座敷の場 都て雨戸を立切りし奥の間の休本
 雨にて道具納るト上手より丹治雨に濡れ出で來り戸を叩
 く内よりお龜寢問着形にて雨戸を開けのなは旦那 (丹
 治)コレと傍りへ思入 (龜)首尾は如何でござりました (丹)
 手筈は充分 (龜)夫はマア此雨に御苦勞さまでムりました
 何うぞ此方へト雨戸を取除ける丹治は足を濡ふお龜は有
 合ふ寐問着を取て着せ (龜)是で娘も此身も安心 (丹)然ら
 して悴は何う致した (龜)委細ことをお話し申して宵から
 其間で娘と一處に (丹)モウ寐たか (龜)ハイト此時下手の

暖簾口より多助出で來り (多助)阿母さん唯今ト是にて雨
 人詢りなし (龜)お前は多助 (丹)何うして爰へ (多助)ハイ
 元村からの歸り道馬が些ツとも歩娘ので圓治とんに曳
 て貰ひ夫で遅く成りましたト此時上手の意を明け丹三郎
 お榮寐問着形にて半身出を多助思入あつて見れば枕も雨
 個あり殊にト間のその内には (皆)エ、と愕然するお
 龜ちやツと行燈の火を吹消すを木の頭お榮は丹三郎に叩
 きお龜は丹治に叩く多助は怪しむ思入此摸稜合方に之相
 子慕

四幕目

●下新田居酒屋の場 都て田舎茶屋の道具宜く爰に百
 姓の仕出し大勢床凡に腰を掛け烟草を呑み居る茶店の婆

小菊立懸り居る此模様御めいた唄にて暮あくと今日
 は此家の二階にて村一同の寄合があるといふ筋の臺詞わ
 たつて皆く正面の階子段を上り奥へはいると直に向ふよ
 り丹三郎出て来り紐さん今日も暑いな(小菊)オ、例お出
 の殿様最前から子守が何遍となく卿を尋ねて来ましたわ
 いなア(丹)ハテナ子守が尋ねて来た何は兎もあれ一抔つ
 けて呉れ(菊)長まりましたト兩人内へ這入る直に向ふよ
 り多助羽織着流にて出る跡より百姓大勢附て出て来り床
 凡に腰をかけお籠お榮が姦通をして居るから棄て置ては
 不可と云ふ忠告のせりふ有て下手へ這入る跡に多助思入
 めつて(多)儼も然うとは知つては居れど相手の御領主土
 岐様の御家来なり且は事を荒立なば血で血を洗ふも同じ
 道理ト色くせりふ有て涙を溢して居る爰へ橋懸りより前

幕のお爲お作出て来り多助を視て(お爲)アレ又本家の多
 助さんが泣いていがんす泣なら寐そべつて泣ッせへトお作
 を多助の傍へ突やり是より色く可笑味の口説せりふ有て
 ド、お作の文を懐より出し多助の袂へ入れやうと爲る多
 助袖を振り拂ひ二階へ上る是にて文は下へ落る爲作心附
 を思入あつて下手へ這入る直に丹三郎奥より出で来り
 (丹)土百姓が詞といふ多助までが知た様子是では滅多に油
 断がならぬト言ながら落たる文を拾ひ上げ是は今娘が
 彼の多助へ送つた文わんな奴にでも惚る女があるといふ
 は餘程妙だ然し是も何かの役にたつたらうト袂へ入れる
 爰へ子守娘お榮の文を持ち出で来り丹三郎に渡す丹三郎
 讀むこと有て文を丸めて袂へ入やうとして落し心附下
 手へ這入る直に二階より太左衛門まだ新太さん見ぬ

かいなアと言ながら出て来り文を拾ひ見るこ有て丹三
 郎様お榮よりト喚驚して文言を讀む此時多助二階より下
 て来る太左衛門驚いて手紙を袂へ匿しオ、多助かト多助
 の顔を見てホロリと爲るを道具替りの知らせ憎い奴ぢや
 なアトヒつと思入多助は合點のゆかぬ技体此摸標在郷の
 いた唄にて道具ふん廻す
 ●鹽原多助内の場 都て多助内座敷の道具宜しく爰に
 お龜お榮丹三郎酒を呑居る此の摸標浮た合方にて道具納
 るト丹三郎以前の文を出し世間の人とい、多助までが情
 交ある中を知た故此文を證據に科を拵らへ多助を追ひ出
 さうトいふ筋の臺詞あつて三人相談をなし居る爰へ多助
 下手より出て来り (多)阿母さん唯今歸りましたト是にて
 三人恠りなしお龜は文を隠し (龜)多助お前分家の娘お

作といたづらを仕て居るだらう (多)夫は誰がでがんす
 (龜)とばけなさんな書たものが慥な證據ト以前の文を出し
 夫婦に成て一年以來お榮をば邪見に仕たは分家の娘と交
 情ある故然ういふ水臭い男と添しては置れぬから今爰で
 離縁状を渡しておくれ (多)たとへ書た物が有やしては吾
 儕は覺ぬはねへのでがんす (龜)覺ぬがなれば夫でいから
 妾と一緒に来ておくれ (多)来いとは何首へ行くのせがん
 す (龜)ハテ知れた事此文を證據にしてお前を分家へ連れて
 行のさ (多)マア阿母さん待て下せへ (龜)そんなら離縁状
 を何故書ないト長烟管にて多助を打擲なしト、額を撲つ
 是にて眉間に疵つく爰へ以前の太左衛門出て来り中へは
 入てお龜を止めるお龜は文を出してお作と密通したとい
 ふ太左衛門は思入あつて (太)是は成程娘の附文然し良夫

ある女でなければ姦通といふでもなし世に立派な亭主
持ても姦通をする奴が (三人)エ、と愕然思入 (太)サ、幾許
もあるではないかいの (お榮)それは大概多助さんの様な
人でムんせう (太)イヤ多助には決して無ければ世間の親
や女房には (三人)エ、 (太)お榮ありや今日斯ういふ文を
拾ふて出たト以前の文を出すお榮丹三郎見て恠くりする
太左衛門こなし有て (太)此手紙の文体では亭主が邪魔に
成る故に科ない者に不義の名をつけ追出さうと悪い較計
○コレ手を出して何をすのぞ讀たくば讀で聞さうと思
入のつて名前は丹三郎様参るお榮より (多)そんなら其文
はお榮より (太)イヤ江湖には同じ名もたんとあるトこな
し有て乃でお龜どのに相談が有のぢやが主が知ても知い
ても世間へ出せぬ文なれば一緒にして焼棄たいと思ふの

ぢやが娘の手紙を何と小生には下さるまいか (丹)成程是の
穩便の取計らしい迹に證據の遺らぬやう (龜)望みに任して
彼の手紙は (太)此太左衛門に下さるかト捨せりふにて二
通の文を佛壇の燈にて焼棄思入あつて位牌の前に住ひ
(太)コレ多助お龜さんにもお榮にも此の位牌は知て居やう
去年六月三十日兄角右衛門が臨終に多助お榮の其の中に
倚しものことでも出来して夫婦別かれなとする様な事で
も有た其時は汝が後見に成て呉て何うか壘原の家に疵を
附ぬやう仕てくれと頼まれたのが現世の訣れ其一周忌が
済だ計りで如此もめでとが出来て来て頼まれた甲斐も
なし又佛へも濟ぬに依て今焼棄た手紙同様遺言が反古に
成ぬ様自今身は眞み夫婦中よく暮してくれ (多)ハイ有
難うがんです阿父さんの遺言の決して背さは致しません

(太)オ、僕もそれで安心したトレモウお暇を致しませうト
 四人顔を見合せ思入有て太左衛門は下手三人の上手へ這
 入と是より床の上りに成る上る跡に獨坐原多助邪
 見の母や女房の道に背さし淫奔の身には憎しと思へども
 亡父への孝と義理合に口へも出さぬ切齒る主人の心を想
 ひやり飛で出たる下男の五八ト此文句の内多助色く愁ひ
 のこなし下手より五八出て来り (五八)多助さん無くやし
 かんべエ吾が聞てさへ腹が立てなんねへに能く辛抱さつ
 しやツた吾も和公と一緒に成て家の爲に働さやすから我
 慢して居て下さい上主人思ひの忠僕が詞に多助涙を流し
 (太)オ、五八ヨウ云ふてくれた原親子の事を言立れば位
 牌へ泥を塗くること今迄辛抱して居たが實にモウ憂く
 つてト涙を拭ひ宜敷くさし五八も種くこなし有て (五)御

尤でがんす然しおんたが内を飛出でもさつしやツたら直
 に原親子が乗込で来るに違へねへ然うすると此家を他人
 に奪れねばなんねへから何卒何處へも往て下せへますな
 (多)夫は決して案じてくれな此家を捨てて出ては養父に濟
 ねへから (五)六聞て吾安心したでがんす上主の多助の心
 体を聞て安堵の折柄に様子立聞く母娘の者トお龜お菜出
 て来り (龜)出ぬと言つても出さぬに置れぬ (五)何で出さ
 ねば置れぬのでがんす (龜)多助お前去年庚申塚で圓治郎
 を殺した覺ぬが有うがね 上「思もよらぬ詞にびつくりト
 多助胸くりなし (多)寝耳に水の其疑ひト多助屹度なる
 上「顔色かへて座を進めばお菜は傍から引取てト多助宜敷
 こなしお榮多助に膝突かけ圓治郎を殺したといふ盛詞お
 る 上「餘りの事の難題に多助の呆れて詞も出せ母の顔の

み眺むれば五八は泣聲ふり立てト五八こなし有て前へ進
 み多助が圓治郎を殺しさうな筈もなく其殺さぬ證據には
 五八が首を賭て保証するといふ筋の臺詞あつて屹度なる
 をお龜耳にもかけず(龜)何は兎もあれ人殺しは内に置れ
 ぬ早く出て往ッてかくれ 上ト多助の手を把り引立れば
 ト多助驚き(多)阿母さんの言ことは背かぬといふ願がけ
 てがんとす圓治郎を殺したといふ情ない幼少い時から
 同村で育つた竹馬の朋友に何遺恨が有て殺しやせう(榮)
 殺さぬ事はムんすまいお作さんの養子に行く約束のある
 圓治さん故殺して兩個未長く樂まうといふ前の精神夫
 程お作さんと添ひたくば妾に遠慮はいらぬ事今爰で離
 狀を書いて下さんせコレ多助さん黙ッて居ては譯が分らん
 早く書て下さんせエ、モ焦燥い男だぬへ 上親の威をか

る女房が詞に有繫柔和の多助も耐へかねたる面色に忽忽
 怒の青筋立(多)黙止お榮阿母さんは何を言ふと語返し
 仕ねへのだがあなた女で同じ様に覺ぬもない事廉にとり離
 縁狀を取うとの阿爺が遺言を忘却たり其遺言さへ無なら
 ばあなた方が方から望いで離縁したいは山くなれど阿爺に
 濟ねへから言たい事も堪へて居る乃公が心に附上り餘ま
 りな言たいがいソリヤ多助が云ふ詞だ 上平生に異つて
 荒くしき多助が詞に此方も募りトお龜屹度なり(龜)何だ
 娘に向つて利た風なことを云ふのは母の妾に云ふも同前
 アノ愛な親不孝め 上ト警撫んで引倒せば五八驚き絶り
 止めト又句通りあつて五八色よく宥ること宜敷 上泣聲
 立て止むれど此方はいつかかな聞ばこそ大の男を引廻し
 ツ叩つさいなまれ多助のゆるしを覓むれど許さぬお龜を

漸々と引放したる下男の五八ト此内五八捨臺詞にて留る
多助も引廻されながら詫ること有てド、五八お龜の手は
附て放し(五)酷いことをさつしやりますな○モシ若且
那何處も怪我はがんせんか無愛い事であんべいが何處へ
も行かそに辛抱して下せへよ(榮)イエ、出て行ぬとて
内に置ては係りあひ(龜)人殺の科人には添して置れぬ娘
のお榮上(龜)造憎む母親の詞に五八眼を刺出しト五八こ
なし有て甥なり子なりの多助故隠すのが道なるに却つて
親や女房が先に立てぬめくとは呆れて語が言ぬトいふ筋
の臺詞あつて宜敷くなしある上(遠慮)會釋も内儀の惡口
聴くに聞兼多助押止めト多助云ふなどいふこなし五八耳
にも掛せ十四年跡の八月に多助が愛へ養子に來お龜は九
月に此の家へ來て一年後に後妻に成り有難果報だと涙を

溢した恩を忘れて多助を邪見にしては世間へ對して濟ま
ひトいふ筋の臺詞いろ、あるお榮お龜は面倒などいふ
思入有て立ちどする五八捨せりふにて言諍ふこなし上
持餘したる親と子に附纏ふたる五八が強情ト一ト間の内へ
入る迹に多助が胸裏は右思左考思案にくれて居たりしが
何思ひけん心に悟りト此上るりの内皆く上手へ這入る跡
に多助文句通り思入あつて(多)今よく、考へれば去年
圓治が殺された其夜宅へ戻つた時魂消た面をさつしやッ
た阿母さんの様子を追想ば胸に當る今日の難題ト是より
彼の晩圓治郎を殺せしは原親子の所業にして彼が内へ來
る度に背が必ら老嗽くは畜生ながら誓を見覺ぬしものな
らん假令養父の遺言に背けばとて命のある間爰の家を出
て行より外思案がないトいふ臺詞あつて上言つし立て

佛壇の養父の位牌に打向ひト位牌に向ひ此家を扱て江戸
 へ行き奉公をしてなりと金を溜め盤原の肥の絶さぬとい
 ふ筋のせりふ有て位牌に暇乞のこなし宜敷 上生るが如
 く父親の位牌に詫る孝子の心いたましくも又衰れなり良
 あつて涙を拂ひト文句通りあつて夫にしても高平迄豆を
 積で行く約束青にも今日を限りの別れにドレ豆を附けて
 行かう 上又もや向ふ佛壇の父の位牌に打向ひ額づく眼
 にはいつばいの涙を含む稱名も口の裡なる忍び泣袖を濡
 して出て行くト色よくこなしあつて下手へ這入る直に上手
 より丹三郎お榮お龜出で来り歸るといふ丹三郎を龜榮に
 て無理に止る件にて柏子幕

五幕目



●沼田ヶ原麥馬別れの場 一面平舞臺の草原中央に松
 の大樹向ふ油畫にて野山の遠見正面に電氣仕掛の満月都
 て他の燈火を消し月の光輝のみを用ゆる拵へ風の音時の
 鐘にて幕あくと直に床の上るりに成る上るり暮て行く
 野は順禮の笠ばかり行はど仲し夏草のいさを排ふ涼風
 の音色を運ぶ牧笛も人里遠き沼田ヶ原置の苦熱を取返す
 夜道をかけて鹽原多助今日ぞ故郷の名残りぞと見返る空
 の望月に嘶く駒の足なみる屠所の羊に異ならで別れを惜
 ひ畜類の心あり氣に見たりけりト此上るりの内多助馬
 を曳き出て來りこなし有て(多)コソ青よモウ爰で別れに
 やなんねへ随分達者で居てくれよ 上言つゝ馬の面を撫
 でト文句通りあつて十二歳から曳馴て斯うやつて長い間
 一所に居れば畜生でも兄弟同様に思ふて居たが今は故郷

に居る事も叶はね(吾が江戸へ往つたなら汝に袂を遣る者もなく可愛さうでなんねへがト色く盛詞あつて宜敷くなし)上「我兄弟が雇人に語言ふ如く言聞す詞も果は涙にくれ聲をあげて歎きしがやうく」に泣眼を拭ひ(多)責ては袂の飼仕舞青ヨたんと喰てくれ上「涙ながらに取卸す吠を首に掛まくも神ならぬ身の今日愛で手飼の駒に別れんとは夢にも幸や白馬の袂も月によしあしを見分けて食す野邊の草ト此文句の内袂をやるこなし有て今日も上下で四里の道無腹が空たらう寛くりと喰てくれ上「とせりふあつて」上「猶様」に備ひれ馬のいつかな食もせせ首俛たるれば(多)コレ何處ぞ惡ひのか上「馬の面を差覗ばさる悲し氣の顔色にて眼には涙の玉の露草葉にお

くを見るよりも多助堪らむ吠どり除け(多)オ、青ヨ泣て居るのか畜生でさへ名残を惜み草さへ喰せに泣て居るに現在甥なり従兄妹なり筆や亭主でめりながら殺さうとは何事だんべい上「鳥や獸に劣つたる人非人めと拳をば握る涙の恨みなきトこなし有て財布を把出し此は今日高平へ送つた二俵の豆の代拐帶したと言れては己の耻なり家の疵上「心から正直まつ法の多助が跡に残し置く財布を荷鞍に結びつけ行んとするを脚へて止めト馬が多助の袖を止る(多)コレ何をすのぢや放してくれ上「無理に振り切り行足の草鞋を踏ればつたりと轉る縋絆の袖くはへて又も放さねば起き上つて涙にくれ(多)コレ放してくれ頼むわい」上「頼むと計り振り切れば又引留る飼馬の情ト此文句の内何遍となく行掛ては馬に引戻され色くこな

し有て上「斯ては果じと搦原多助心強くも馬押退け名残り惜氣に出て行くト馬を押のけこなし有て花道へ這入る上折柄酒に性体も夏野の原を千鳥足ト丹三郎お榮の手を引さ出て来りお榮馬を見て（お榮）オヤ是は内の青だよ（丹三郎）成程然うだ搦原と印したる此腹當是も多助が一個の落度になる事也、あお榮曳て行くがよいト是にてお榮繫ぎし馬を解く馬はお榮の肩先に嘴附くお榮はアツと倒れる（丹三郎）此畜生めト刀を抜て馬の胴腹を貫く馬は丹三郎に喰つく是より兩人馬と立廻りに成りト、馬は兩個を酔く嘴殺して倒れる爰へ原丹治お龜出て来り此体を見て洵りせしこなし此時馬は起上り丹治へ嘴附にかゝる丹治刀を抜て馬の胴腹を貫き悴の敵お榮の警ト馬に片足踏かけるを木の頭畜生めと止を刺すお龜は娘ヤ一いとお榮に

縫る此模様早めの合方風の音にて柏子幕

六幕目

●八時在庵室の場 本舞臺上手地藏堂下手庵室の道具爰に愛心尼腰衣の拵らへにて蚊遣を燻て居るお貞お虎百姓女房の拵らへにて腰をかけて居る此摸縁木魚入の合方にて幕のくトお虎お貞お妊お此處の子安地藏へ日參をして居るといふ筋の臺詞あつて花道へ行く此内向ふより丹治お龜出て来り兩人に行合ひ庵室を尋ねること有て舞臺へ来り途中にて日を暮し難澁故と一宿の舎りを乞ふ愛心尼心よく承諾兩人を内へ入れお龜と顔見合せ喚驚する（お龜）ヤア妾新は變つて居れどお前は又旅のお覺さん（丹治）スリヤ此者がお覺とな不届奴めト刀を抜かける（覺）

ア、モウシ待て下さりませ私もよい年齢して親子連にて
 旅を稼ぎ悪事の數も仕拔きましたが倅小平はお繩を戴き
 去年の冬に半死致し獨りの子を殺したか愈々此身の異見
 に成り是もみんな悪事の罰と夫から心を洗ひかへ罪消滅
 に天窓を刺り佛に仕へて念佛三昧何卒晴昔の悪い事は此
 天窓に免じ御勘辨して下さい此通りでムい升上手を合し
 て拜む丹治こなし有て (丹)倅が半死に心も折れ敗心せし
 が實なら命がはりの頼がある何と聞ては吳まいか (覺)ソ
 リヤモウ駒命て下され升なら決して否とは申ませぬシテ
 頼みと被仰るは (丹)其頼みといふは他でもないト是より
 不圖せし事よりお龜とわりなき交情と成り又倅は其方が
 勾引せし娘とわりなき契を結び暮す内兩人とも手飼の馬
 に噛殺されて非業に死し且お龜の腹に胤を舍し最早既

に七月故夜に紛れて出奔せしといふ筋の臺詞あつて人の
 噂も七十五日はどはりの冷却内何と二人を隠匿ふての吳
 まいか (覺)それは何より易いこと昔の悪事のお詫の爲
 (丹)スリヤ頼みをば承諾して (龜)爰に置いて下さんすか (覺)
 お置き申さいで何としませう (丹)夫で乃公も安心した○
 併し草臥休めに一杯やつて寐たいと云ふ注文だが何と酒
 を買て來ては吳まいかと丹治は胴巻より小判を出しお覺
 に渡すお覺徳利を提げ表へ出る此時下手より次立仁助出
 て來るお覺手を把て花道へ連れて行叩きながら向ふへ這入
 舞臺の兩人はあらい蚊だといふ臺詞あつて紙帳を釣り中
 へ這入此時覺心徳利を下げ直に内へ這入り (覺)サア大變
 でムい升よ今名主の所へ往つたらお前さん方の人相書が
 廻つて○ア、苦敷いト酒を呑み今爰へ手先の者が参り升

から早うお逃げなさいませ出口は、
 うから裏道を岩山村まで御案内致し
 (丹)オ、と身繕ひするを木の頭お龜丹治周章たる動作此
 摸稜早めの合方にて柏子幕跡山嵐にてつなき後の道具
 出来次第直に引かへす
 ● 岩上村多助盗難の場 都て山の半腹の道具山嵐合方
 にて幕明くト花道の下より道連の小平胸金の一本差脚絆
 草鞋がけ跡より次立の仁助出て来り捨臺詞あつて祠の様
 に腰をかけ蓑を喚み居る此内花道の下より多助出て来り
 臺詞あつて本舞臺へ来る小平透し見て (小平)ヤイ待く汝
 は下新田の多助だ (仁助)ナニ多助だ (多)ハア誰人様で
 はんすかト透し見て胸くりなし逃にかゝるを小平多助の
 首筋を捉へ (小)ヤイ多助汝も記憶て居るであらうト是

より強請に往て失策い寺参りに待伏して侍に邪魔しられ
 今に上州一國に彷徨の皆汝が爲だトいふ筋の臺詞あつ
 て多助を蹴飛ばし定めて懐中には金が有らうから身ぐるみ
 脱で置て行と仁助と兩人刀を抜く多助は喚驚なし詫る兩
 人は聞入れせ、多助を纏絆一枚にして首に掛たる財布
 を奪り又纏絆を脱さうとする多助は腕ぐまいとする争ひ
 の内多助過つて大せりへ落込兩人こなし有て財布の中へ
 手を入れ搜り見て胸くりなしヤコリヤ皆なヒタ錢だト財布
 を下へ叩き附る此時花道の下にて (覺)モシおわぶなふム
 いますヨト之にて兩人思入あつて小陰れをする花道の下
 より覺心お龜丹治出て来りせりふ有て舞臺へ来り丹治小
 判一枚を出し禮を言ながら覺心に渡す覺心こなし有て
 (覺)旦那は少しだね (丹)いづれ世に出た其時には (覺)馬

鹿な事を言なさんな早桶へ片足突込で居る妾の躰お前さ
 ん方の世に出る迄お覺の壽命はございませんヨ (丹)然ら
 ば幾許欲しいといふのだ (覺)幾許かくらとは言ねへから肌
 に附た金は固より身ぐるみ尻で貰ひたひ (丹)龜エ、と胸
 くりなし (丹)扱は改心仕たと言ッたは其場逃れの偽言に
 て (龜)まだ心が直らないのだね (覺)知れた事だ (丹)如何
 にも望み通り金が欲くば異てやらうサア受取ト扱打に切
 附る是にて以前の兩人出て来り扱つれて切てかゝる覺心
 も懐中より出刃庖丁を出し宜しく立廻り丹治は仁助を切
 る覺心はお龜を振じ伏咽もとを突かうと爲を丹治は覺心
 の脊中より切付る是と同時に小平丹治の脊後より切附る
 お龜の危くなり大せりへ飛込ひ丹治は仁助を切下げ是
 にて仁助は落入る是より三人立廻り宜敷めつて能き見得

にて知せに付き二重をせり上る此の内始終立廻りあつて
 丹治覺心を切倒し止を刺す小平丹治の肩先より刀を突込
 み屹度見得是めて覺丹苦み落入此内道具せり上る事のつ
 て上より震を卸し三人の姿を消す舞臺の一面の山幕と成
 り跡山廬にてつなぎ後の道具出来次第山幕を切て落す
 ●吾妻川假橋の場、都て山中谷川の道具爰に山口屋善
 右衛門手代和平旅形にて立懸り水に濡て絶息して居る多
 助を介抱して居る此見得時の鐘水の音鶏苗にて幕あくト
 (和平)旅人ヤーイ (善右衛門)心を儘に持なさいト介抱す
 る是にて多助ウンと息吹かへす (善)氣が附たか (多)ハイ
 (和)氣を儘に持なさい (多)ハイ有難うムい升何處のお方
 か知りましねへが御親切によくお助け下せへました有難
 うムい升 (和)然うしてお前は何處の者何で此首に死で居

たのだ (多) イエ決して儼から死だのではがんせん江戸へ
 奉公に行途中退剝に出會まして路銀も着物も取れた揚句
 崖縁から江に落夫から先は何にも知れその儘死で仕舞た
 ら養父の家も立られ老濟ねへ事でもがんとしたに貴所方の庇
 蔭をもつて生かへつたは命の親何とお禮を申すべいか
 (善) イヤ其禮には及ばぬと養父の家を立ねば成ぬ體とは
 (和) 一体夫は何ういふ理由だへ (多) ハイ夫を言ては親の
 耻なり小生の外聞ト言兼るこなし (善) 其仔細は知らぬと
 む死では養父に濟ぬと云ふたつた今の一言で心体は分つ
 て居る吾は江戸の佐久間町で炭問屋を渡世にする山口屋
 善右衛門といふ者だが何とお前奉公をするのなら吾の所
 へ奉公せぬか (多) エ、と悔くりなし何と被仰い升そんな
 ら貴君の所へ雇て下さへますか (善) お前さへ承諾なら吾

ど一緒に江戸へ来なさい随分お世話もしようから (多) 何
 にも申しませぬ且那有難うムいやすト涙ながらに喜ぶこ
 なし此内しいう雞笛にて春後の遠見段々に徹明夜明け近
 くなる詠らへ (和) 且那縁東がしらんで参りました徐々と
 出かけやうではムりませぬかト是にて善右衛門臺詞あつ
 て合羽を脱ぎ多助に貸てやる多助濡縹絆と着替へること
 あつて善右衛門の荷物を持三人せりふ有て
 花道へ行く此時上手よりお龜髪をさばき所々破れたる以
 前の着附にて出で来り思入あつて (お龜) 此身に恙なけれ
 ども案じられるは且那の身の上ト多助お龜の聲を聞つけ
 (多) 聲は何うやら (善和) 女の襟だなど多助提灯を上けて
 お龜と顔を見合せ (龜) 和主は多助 (多) 阿母さんかと悔く
 りして提灯の火を吹消すを木の頭且那縁夜が明て参りま

したトお龜多助は合點のゆかぬ思入れ此模様宜しく木頭
より遠見の向ふへ電氣仕掛の日の出を出し烏笛驛路入の
馬士頃にて○柏子幕 幕引付ると花道の三人思入あつて
向ふへ這入る

七幕目

●筋違内廣小路の場 本舞臺上手観物小家下手茶店爰
に亭主伊助女房お辨床凡に仲間二人腰をかけ真中に明手
に出仕出し大勢立懸り居る此模様辻打にて暮あくと仕
此内向ふより吉田八右衛門旅形にて財布を茶店の内へ這入
藤助着流しにて出て來り臺詞あつて藤助は上手へ這入八
右衛門こなし有て(八)江戸と云ふ所は何處も賑やかな事

じやなアト餘念なく傍り見廻して居る此内向ふより小平
着流し前垂商人体の拵らへにて走り出て來り八右衛門に
行當る是にて八右衛門は俯向に仆小平も後へひツくり反
る伊助お辨是を見て走り出て來り介抱をする小平やうや
う起上りこなし有て(小平)是は實に申譯がありません柳
原の土手で怪しい奴に跟から尾て來られまして懐中には金
があり萬一取れては成るまいと心配しひく參つた所其
奴が小便をしました故其間にあなた一目散に駆て來てそ
の機會に飛だ籠相を致しました御免なすつて下さいまし
ど色々八右衛門を介抱する八右衛門は躰の痛むこなし皆
々臺詞あつて八右衛門を茶店の内へ連れて這入る引違にて
以前の仲間出て來り捨せりふにて花道へ這入る直に内よ
り小平もみ手を仕ながら出て來り(小)實にモウ料ら宅御

厄介に成まして有難をムリ升る (伊助)お前さんる時の災
 難といふものムリ升るシテ彼のお方は何うあされまし
 た (小)ハイ持合せの薬をお上げ申ましたら少しは痛む癒
 たか今すやくと寐入居られ升然し是は小許ばかりで
 ムリ升がお茶代に取て置て下さいましト懐中より錢を出
 すお辨伊助は捨せりふにて辭退ををるを小平は無理に渡
 し (小)私に横山三丁目播磨屋とまうす袋物屋の奉公
 人小平と申者でムリ升が主人の使の急用で本郷まで金子
 を持て参らねばなりませねば寔に氣の毒でムリ升が今
 にも彼のお方がお目が覺ましたら此事を被仰つて何うか
 宜敷お説をば (伊)宜敷ムリ升お目が覺たら然ら申中て置ま
 せう然し澤山に (お辨)お茶代を (小)イエ何ト懐中へ手
 を入て一寸思入あるのが道具かわりの知せ何う致しまし

てト小平の上手へ這入此摸稜宜敷辻打にて道具ふん廻す
 戸田家邸外の場 總て邸外辻番小家の体甚内辻路の
 拵へにて揚枝を削つて居る此摸稜時の太鼓はて道具とま
 るト上手より小平出て來り (小平)モシお願申升 (甚内)何
 だ (小)一寸手水塙を拜借致し升 (甚)よしト是にて小
 平邊りへ氣遣ひながら股ぐらより以前八右衛門が着て居
 たる半合羽を出し又春中より草鞋脚絆を出し下手の雪隠
 へ出入る此内向ふより前幕の多助炭屋の奉公人の拵らへ
 にて炭四俵を擔ぎ出て來り辻番に鎌田市作といふ人の邸
 を聞く事あつて上手へ這入直に雪隠より小平脚絆草鞋半
 合羽の拵らへにて出て來り懐中より八右衛門が持て居り
 し財布を出し (小)過刻の野郎が呑ながら連に咄の其先
 佐久間町の炭問屋ト甚作小平を見て (甚)通れト大きく云

ふ小平胸くりするを道具がりの知らせ (小) 映鑑さしや
アがつたト此模様合方にて道具ふん廻す
● 戸田家邸内長家の場 都て戸田家邸内長家の体合方
にて道具納ると直に床の上るりに成る 上るり「太刀の鞘
弓の袋に納れる泰平の世も武士の治に居て亂を忘れざる
竹刀の響の絶間なき邸の其中に一ト際願む戸田家の邸
内音勇ましく聞はけるト此上るりの内向ふより多助俵炭
を擔ぎ出て來り (多助) 辻番がいふた通りよく仕るのだ鎌
田市作と書てある〇ハイ御免下せいか頼み申やすト是に
て内よりお菊家中女房の拵らへにて出て來り多助に炭二
俵を内へ入さすこと有て跡の二俵を隣の内へ持て行どい
ふ是にて多助炭をかつぎ上手へ行く此道具折なしてに廻
る

都て續きの屋敷塙門口に菰包の荷物を置わり道具半廻り
にて留る多助炭を擔ぎ門の内へ這入り暫くして (多) 犬が
小便をかけるを焚て臭いから戸を立かけて置やした宜が
んすかト言ながら出て來り 上言つし傍への荷物を見や
りト荷物の木札を見て鹽原角右衛門といふ名に胸くりヤ
此鹽原角右衛門といふ名前前の吾が七歳のその年に別れた
實の阿父様の名前も鹽原角右衛門なら下新田へ貰われた
養父も鹽原角右衛門まだ其外にも同名の鹽原角右衛門と
いふ人があるのか知んて 上「霎時小首を傾けしが (多) 吾
が實の阿父様に別れた後の音信がねへが若や是が別れた
實の阿父様でいあるまいかと考へるこなしあつて 上「心
附ては矢も堪らる隣の家へト多助あわて、上手へ行かけ
て思入あつて跡へ戻る是を木なしにて道具元へ戻る

上「走行ト多助録田の門の前へ戻り(多)モシノ内儀さん
 上「と驚しく呼聲に何事やらんと立出る内儀ト門の内
 よりお菊出て来り(菊)炭屋何だよ惚たしい(多)サア些
 ツと貴女に聞たい事があるのでがんす此隣の殿様ハアリ
 ヤ索から此お屋敷の殿様でがんすか夫が聞てへのでが
 す上「云ふも急たつ震へ聲(菊)此炭屋は可笑な事ばかり
 云ふお隣様は元からの御家来といふでもない○ア、モ
 ヲ何年に成かしらん三十四年前方に新規お召抱に成てか
 らお國語を言付り此度始めて此江戸へ(多)そんなら若や
 其以前は阿部伊豫守深の御家来じゃアがんせんか(菊)借
 さうだと聞て居るよ(多)夫では愈々○有難うがんす上
 と起足さへも早腰を振すばかりのしどろ足元の長家へ
 又木なしにて道具まわり以前の道具にて納る

上「駈戻りト多助一散に門の内へ這入ト是を又木なしにて
 道具逆に通る

●鹽原角右衛門内の場 都て戸田邸内鹽原長家の体上
 るりにて道具とまる 上「入りにける同じ長家の其内にも
 一ト際目立案造は身分あり氣に見ぬにけり多助は息もす
 たくと走り入たる玄關前ト此文句の内多助出て来り内
 儀さん炭屋でがんす上「呼びたつ聲に妻お清奥の一
 ト間を立出ト角右衛門女房お清奥より出て来り多助を見
 て(お清)そなたは炭屋代物でも貫ひに來やつたか(多)イ
 エ代物を頂きに來たのではがんせん子ト聞たい事が有や
 して参りやした上「と言ふに不審の宿の妻(清)シテ聞た
 い事とは(多)他の事でもがんせんが爰の内殿様は以前
 阿部録の御家来で久しく浪人さつしやツて上州小川村に

居た塩原角右衛門様の内儀さんの貴女はお清さんと言ひ
 やんせぬか 上と詳しく知たる詞に胸くり (清)何如にも
 你说の言る通り妾の角右衛門の妻のお清といふ者然うして
 そなたは 上問れて多助は泣聲ふり立 (多)成程別れて甘
 餘年會ひましねへ私だから忘れさつしやツた筈でがんす
 小生和女の子の多助でがんす 上聞て胸くり摺よつて
 (清)エ、そんなら多助であつたるか (多)阿母様お懐しふム
 りやす 上「かなつくりしやと親と子が絶て久敷對面に先立
 むのは泪なり (清)夫にしても合點のゆかぬは何うして和
 主は此江戸に 上言れて多助はシク泣 (多)是には悲
 い譯がたんと有るのでがんすがお父様や母様には能無事で
 居て下せへやしたなア 上「またも泪に吳竹の伏て居たる
 角右衛門兼耳に斯と聞よりも次に來つて障子の障子地と

聞さる物音に妻も多助もあされ顔ト文句通り有て (清)マ
 あなたは我夫 (多)そんなら今のが阿父さまか 上言ば障
 子の内に聲立て (角右衛門)黙止親とは誰がと假染にも服
 襟のお側近く勤ををる此塩原角右衛門炭屋の下男に知べ
 は持ぬト是より臺詞色々有て此江戸にて賤き下男の奉公
 するの察する所親の意に適ざる不埒な事を仕出かして勘
 當されし者なるか但しは酒色に身を果し見る影もなき姿
 となり此江戸表に萍魄あるか孰にしても親の家を棄て出
 しは不孝の罪人目通り叶わぬ出てうせう 上「義を金鐵の
 阿爺が怒る詞を障子越し聞に多助も母親も涙のまぶた押
 拭ひ (清)其お腹立は御尤でいムりますれど若い時の過り
 は世間にも往々あるならい假令家出をしたればとて廿餘
 年が其間逢見ぬ子をば其様に酷たらしう阿らいでも 上

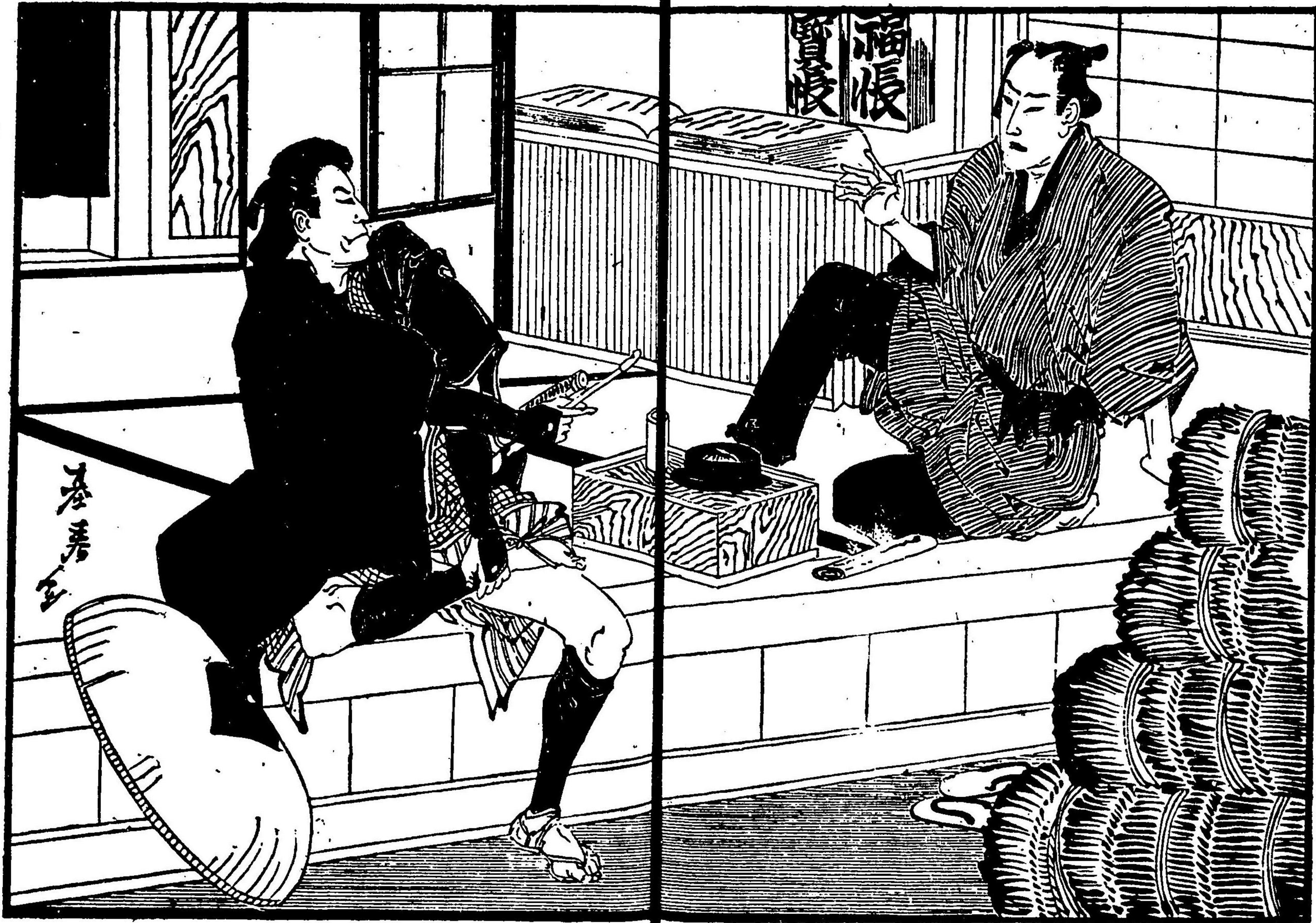
ぞ云ふを言さば眼に角立(角)ヤア子とは誰が事鹿相を云
 ふな阿迦の他人の我々夫婦何う零落やうと構ねぬと夫で
 は武士の義理が濟ぬ長居致さば手討に致すぞ上態と聞
 する高聲に多助驚き身を縮ませ(多)ア、モシ阿父様飯り
 升助り升わい其命が惜い計りに國を出てから長々の難義
 苦勞も養父の爲家が立たい身の願ひそれを今ふち切れて
 は死だ位牌の養父様と言譯ならぬ此多助どうぞ命ばかり
 はお助けなされて下さいやし上父が喝を眞ぞと思ひと
 つたる正直者母は詞を聞とがめ(清)そんなら若や角右衛
 門どのには(多)八年跡に死なしやりましたト涙を拭ひて
 なしわつて是より伯母や女房の爲に家を抜け出途中にて
 災難に罹りしを山口屋善右衛門に飯けられ今は其家に奉
 公を仕て居るといふ筋の臺詞宜敷お清こなし有て(清)親

への義理も孝行も辨へ知つた悴なら逢てやつて下さりま
 せ上と窓の障子に手をかくればトお清障子を明やうと
 するを角右衛門留て(角)イヤまで女房ソリヤ成ぬ(清)と
 は又なせに何故に(角)逢ては彼が爲に成ぬイヤサ立派な
 人となる迄の目通り叶わぬ立歸れ上口には言と心には
 不憫の者やとせぐり来る涙呑み込み入りければト角右衛
 門こなし有て涙を拭ひ上手の内へ這入上妻も涙に呉竹
 の節ある長夫の言の葉につさ穂も泣目拂ひつ、是非なく
 此方へ立戻り(清)コレ多助逆もみ逢ひはなさらぬ故歸へ
 つたがよいわいなア上と本意なげに言ひ聞ればト多助
 は母に執成して逢してくれと頼む臺詞色くあつて上我
 を忘れて縁側に頼む心のいぢらしさ聞く母親も耐りかね
(清)機を見て母が執成する程に今日は歸去でたもいなう

上力を添へて説諭せば多助は咽ふ涙を呑込み(多)ナニ吾
 む男でがんとす立派な人になる迄はモウ逢には参りましぬ
 へ上と言つ、立て行かゝるを母は本意なき限りなくと
 此内角右衛門多助の標子を伺ひ健氣なといふ思入あつて
 (角)ア、コレ清炭屋を一寸待してくりやれ良夫の呼ぶは
 心解け對面許す事もやと心嬉しく女房か清(清)コレ多助
 阿父が待と被仰る一寸まちや上我子を暫と止め置き夫
 の居間へ打通れば角右衛門手函より金取出して妻を招き
 (角)今日食祿を頂戴致すも角右衛門殿の庇蔭なれば鹽原
 の家再興の補にせよと渡してくれト金を五十兩出すか清
 受取り此方へ來り空詞あつて多助に渡す多助金を押返し
 鹽原の家を興すには親にも人にも厄介になりませぬ○達
 者で居て下せいまし上跡をも見せして走り行ト此上る

りにて多助金を返して一散に花道へ這入上母の餘りの
 本意なきに保ち兼ねたる恩受の泪にくれて居たりしが女心
 の遺瀬なくトこなし有て上行んとするを一間より(角)
 アイヤ女房まづ待やれ上言つ、立出る角右衛門ト角右
 衛門出て來りお清を止(角)歎くな女房態と難面言なせし
 は彼が心を斷ます爲彼奴なかく○ト金包を下に置くを
 道具替りの知らせ○感心な奴だ上感ヒ入てぞト感心の
 思入お清はちつと泣く此模様床の三重にて道具ぶん廻す
 ●山口屋店先の場都て佐久間町炭問屋店先の体爰に
 小平以前の拵らへ手代和平小役善太郎三人住居丁雅幾松
 茶を汲んで居る此模様稽古唄にて幕あくと奥より前幕の善
 右衛門出て來る小平以前の八右衛門の財布の中より仕切
 書添書等を出し八右衛門と名乗八十兩の金を受取て居る

此内橋懸りより多助出て来り小平を見て不審の思入あつ
 て襟子を伺うて居る小平の金を受取下手へ行掛るに多助
 ツカ〜と行き小平の胸ぐらを捉へ(多)コリヤ泥棒待て
 (小)ヤ我は多助ト胸ぐらなし振放さうとする(多)昔来てく
 れ泥坊だ〜ト是にて暖簾口より仲仕大勢出て来り小平
 を散々に打擲する(多)番頭さんこんな者に金を渡すとい
 ふ事ががんすか(善)イヤ〜多助是は下野の飛駒村の荷
 主の息子(和)八右衛門さんといふか人(多)何を被仰いま
 す死な命を旦那様にお助けられた其時の追剥の泥棒で道違
 の小平といふ奴でがんす(善)エ、ト胸ぐらする此時下手よ
 り八右衛門伊助出て来り私が實の八右衛門にて昨日此奴
 に荷物と着類を盗まれたといふ是にて大勢捨せりふにて
 水を汲んで来て小平に吞す小平苦敷こなし有て起上り(小)



茶房

公が方から炭俵の口を切てぶちまけ出たら底を叩て何も
 彼も言ッて聞さう聴さやアがれト詭らへの合方に成り實
 はおれは江戸産れ長らく三田の三角に住だせへか根性ま
 で曲つた針で客を釣る引手茶屋もした者だが夫も眞の上
 意の聲を防がふ爲の刑罰除で其内證は親子連旅を稼の喰
 せ物隠分餓鬼の時分から一度草鞋を穿せへすれば大した
 仕事も仕て来たが何ういふものか此頃では機運が凶さに
 お構ひの土地へ歸つて一ト花と思つた仕事も仕謀せイザ
 お立といふ段に多助野郎に見附られたら乃公が運もモウ
 是迄ヤア殺すなら鉄砲でも鎗でも早く持て来い何うか
 は野へ出した死人も同じ刑狀持道連の小平といふ胡麻の



灰はふれが事だト是より物を盗た事もなし騙取に來た覺
 もないと裸になつて着物を振ひ無疵な骸に泥をつけ撲や
 アがつた此白地は一体何うして呉るのだト善右衛門思入
 めつて貳拾兩の金を出して遣る小平は八拾兩を無れば否
 だど強情を張る多助堪へ兼しこなし有つて色々く從來の惡
 事を言ひ立て二拾兩を貰ふて歸來といふ小平聞入也(小)
 斯う成た上からは金は何處までも貰ねへ其かわりには
 此多助を抱て行にやア成ねへのだ(多)コレおれを抱て何
 處へ行のだ(小)汝を連れて半へ行のだ(多)エ、〇ト悔りな
 し思入あつて前へ出で〇大騒ぎをして首を投出し取た所
 が八拾兩夫れに引替吾が所の且那標は僅か一時の其間に
 千兩も二千兩も儲ける人に競れば少い考へだから心を懸
 し堅氣になれど色々と異見をする小平改心せし思入あつ

て(小)カウ多助よく言てくれた成程汝の云ふ通り一ツ仕
 事を仕祿といふには首から先へ投出して脚半草鞋に半合
 石田舎者の擬似までして首尾よく詐取た其處が金はたつ
 た八拾兩ト是より色々懺悔せりふ有て改心せしこなしに
 てドレモウ乃公は歸ると仕様ト起上り二拾兩の金も改心
 すれば貰ねぬから草履を一足くれといふ是にて多助大勢
 の仲仕お言つけ草履を懸しく持て出て積上る皆々見てテ
 モ夥しい此草履はと恟りする(善)是は其多助が落た藁を
 ば拾ひ集め(和)夜の目も寐せに作つた草履(小)そんなら
 是はアノお前が(多)コレ小平物は仇には成ねへもんだよ
 うト是を見て小平思入あつて(小)人の物を吾物と唯取る
 金の事なれば湯水のやうに遣つたが今此の草履の事を思
 ふと錢金といふ物は仇あろそかには消費れねへトじつと

思入是を時の鐘に成り(小)アリヤモウ暮六ツ〇夫ヒヤア
 草履を一足貰つて行かうト草履を穿き今度逢ふ時は道伴の
 小平ヒヤねへヨと躰の痛むこなしにて花道へ還入八右衛
 門思入あつて八拾兩の金を詐取られる所をば無難に濟だ
 禮として貳拾兩を多助にやる多助は辭退して是を押返し
 思入あつて(多)其代りには儂か願ひががんすが叶へて下
 せへやせうか(八)吾はお前の氣性に惚たから出来る事な
 ら何なりとシテ頼みと言なさるは(多)千兩の荷が送つて
 貰ひたいのでがんす(皆)エト胸りする(多)何も魂消
 ぬへで宜がんす今日料らさる實の親に戸田様のお屋敷で
 逢ひやしたか吾儕の身形が汚ねへで乞食でも見るやうに
 言れやしたか心外でならねへのでがんす夫故モウ二年勤
 て年が明きやしたたら禮奉公を一年勤めクワンと遣て何う

だど親に見せていのでがんす夫も唯貰ふのではがんせん
 儂其荷を賣こなして貴公の所へ金を入れるだ金を入たら
 又送つて呉る譯にするのだからお前さんも得意が一軒ふ
 ねると云ふもの屹度送つて下せへよ若送る事が間違ふた
 ら千兩の金を還べいといふ書附を下せへまし(八)面白い
 書ませうト紙を出して書附を認める事あつて印形を捺し
(八)是で宜敷か多助に渡す和平善右衛門伊助是を見て
(和)モシ旦那大層なことを願つたではムりませぬか(善)
 夫も日頃の心がけが宜あ人も得心して(伊)送る積荷が
 千兩とは(多)旦那さん(善)ナイ(多)番頭さん(和)何ぢや
(多)是もあなたのと証文を抜くのが木の頭〇皆統蔭で
 がんすト証文を戴く此模様宜敷合方にて〇柏子幕

八幕目

●本所四ツ目掛茶店の場 都て本所四ツ目川岸通りの
体愛に茶店の婆々お倉裏長屋の唄お傳立懸り居る此模様
唄浪の音にて慕あくとお傳は捨せりふにて下手へ這入此
内向ふより久八樽買の拵へにて出て來り茶店に腰をかけ
る此内又向ふより多助炭賣の拵らへにて出て來り茶店に
て久八と出逢色々と錢儲け節儉の談などあつて久八は上
手へ這入跡に多助手づから茶を汲んで呑で居る此内上手よ
りお龜盲目乞食の拵へにて十一歳位の子役の乞食に手を
曳れながら出て來る子役は腹が空た故茶店にある芋を買
てくれといふ臺詞あつて茶店の前へ來る多助お龜の顔を
見て恟くりなし (多)ヤあんたは伯母さんではがんせんか
(お龜)妾を伯母さんと被仰る貴君は誰人様でムり升る

(多)ハイ十一年以前沼田で別れた多助でがんす (龜)エ、
ト恟りなし多助であつたか面目ない面目ない (多)モシ伯
母さんあなた面目ねへといふ事が解りやしたかト是より
色々と異見する事あつて餘まり氣の毒でがんすから假が
所へ一緒に來なさい何うにかして上ますべいとお龜を勵
めりながら花道へ這入此時正面の開き戸を開けお花娘の
拵らへお芳下女の拵へにて出て來り (お芳)何と感心な人
ではムりませぬかいなア (お花)さいなア妾も今あの座敷
で琴を弾きながら話を聞ば敵向士の親子をば助けてやら
うといふ志しは實に感心な方じやわいなア (芳)彼の様
な男と夫婦に成り (花)俱に嫁だことならば (芳)貴様お怪
なされましたか (花)コレ其様な事を云ふたら阿父さんに
呵られるわいなアト此時内より藤野屋壺右衛門出て來り

(空)イヤ匠りはせぬ能く惚たト是より彼の炭賣が望なら
 嫁に遣てやらうが所が解らぬから例の樽屋が来たら聞て
 見るがよいとお芳に言附けて空右衛門お花内へ這入る此
 内上手より以前の久八出て来るお芳久八の袂を捉へ(芳)
 樽屋さん一寸来て下さんせ(久)空樽の御用でムリ升か
 (芳)何でも宜から早う来て下さんせいなアトせり立る久
 八は合點の行ぬこなし此摸稔明涙の音にて道具ふん廻す
 ●藤野屋内茶室の場都て茶の間の道具宜しく爰に以
 前の空右衛門お花住ひ合方にて道具留ると(空右衛門)お
 花そちは奥へ往て髪も撫附け外の着物と着替て来るがい
 、樽屋にも逢さぬば成ぬから(花)ハイ然う致しませうわ
 いなアトいそくとして奥へ這入此時下てよりお芳久八
 の袂を捉へ出て来り(お芳)旦那様樽屋さんを連れて参りま

た(空)然う加此方へお通し申してくれ(お芳)ハイ畏り
 ましたモ樽屋さん(久八)それでは御免下さりませトい
 ひながら天秤棒を下手に置き(久八)左様なら貴公様が御
 當家の旦那様でムリ升るか只今お女中から承り升れば
 何か御用があるとの事いづれ樽のお拂ひものでムリませ
 うが御當家の事なれば定めて澤山に○併し御免下さりな
 せト腰を掛け貰入を取り烟管の詰つて居ることなしにて煙
 管を吹き二重の敷居にて叩くお芳是を見て迷惑なることな
 し(空)イエお前さんをお呼び申したは商買用ではムリま
 せぬチト承まはりたひ事があつて(久八)シテ其お聞なさ
 れたひと被仰るは何の事でムリ升トいひながら烟管の通
 らぬこなしにて立つて行き庭木の枝を折烟管の鴈首のや
 にを掘るか芳は頗りに氣を揉むこと宜しく(空)其お聞申

たひは外の事でもムリませぬお前さんのお連の彼の炭屋
 は何處のお方でムリ升(久)へエエあの炭屋でムリ升か
 れは相生町で私の隣の者でムリ升トいひながら其を呑み
 吸売を吹出し足にて踏消すお芳是を見て(お芳)ア、モシ
 樽屋さん然うそこらを踏み散して且那様が大事になさ
 るお庭の苔がだいなしに成り升ぬいなア(空)イヤ、
 芳昔ぐらいは構ひない貴様は奥へ往て茶でも早う汲て來
 いモシ樽屋さん一寸是へ上つて下さい(久)それでは御免
 なされませト草鞋を脱ぎ二重へ上り足を拂ふ此時奥より
 お花好みの振袖衣裳にて茶を汲み出て來り(お花)あなた
 宜うお出なされました(久)お茶を一ツと出す久八茶を啜り
(久)大層甘いお茶でムリ升(空)甘いと思ひ出すお花お
 菓子を上なよ(花)ハイと茶立口を明け菓子を出し久八の

前に置く(久)モシ有難うムリ升がこんなには頂けません
(空)イエお上ににならないでも餘つたら持つて歸つてお
 子供乘にせよお上なさい(久)イエわたしは子もなければ
 唄もない獨りぼつちでムリ升ト菓子を食べ(お花)然うし
 てアノ炭屋さんは(久)アノ男も御同前(花)そんならお獨
 り身でムいまするかいなアト嬉しきこなし有て(お)貴君か
 菓子をたんだお食り下さりませ只今御酒も申付てムリ升
 れば(久)ア、モウシ待て下さりませかうお手厚なされま
 しては氣味が悪うて成りませぬ一体御用は何でムリ升
(空)成程理由を申さねばその御不審も御尤も何と娘がお
 願ひを叶へてやつて下さりませ(久)ナニお嬢さんのお願
 ひとは(空)アノ炭屋さんに私の娘が惚たさうにムリ升ト
 久八エ、恠りする是を合方に成り(空)御覽の通りモウ年

頃でムり升からト是より炭賣の心立に感心して娘が嫁に
 行たひといふから何うぞ樽屋さんの仲立にて娘の望みを
 叶へて運てくれと頼む久八は呆れたるこなしにて (久)モ
 シく御冗談をおつしやり升な是があなた所の御膳
 焚がお針なら眞個にも思ひませうが此本所四ツ目では誰
 知ぬ者もない公儀み駕の御用達藤野屋さんのお嬢さんが
 人にこそよれ昨日今日取附身上の其上に詞も詠る田舎者
 商賣柄とは言ひあがら鼻の穴から手足までまッ黒なあの
 炭賣に惚たの嫁にやりたいのと餘り人を馬鹿になされ升
 な貴家の様な御大家では御退屈でならぬ故樽屋を黽つて
 遊ばうとの御申戯でもムりませうが心なしは使ふなど云
 ふ日の短かい十月最中面白くもない何の事だト立腹のこ
 なしにて草鞋を穿かけるを空右衛門止め (空)マア樽屋さ

ん待て下さい (久)イエ私も商賣のある骸でムり升 (空)サ
 ア其家業を妨げては甚だ濟ませぬが決して黽るの遊ぶの
 どいふ其様な事ではムりませぬ (久)そんなら今被仰つた
 のは虚言ではムりませぬか○斯う見た所が釜の掛つた此
 お坐敷の様子といひ親御さんもお嬢御も餘程御茶人に見
 ぬ升るなアト此時茶立口より以前の下女お芳出て来り
 (お芳)モシお嬢さん貴嬢のお願ひは叶ひましたか (花)まだ
 何ともお返事がないわいのう (久)イヤ宜しうムり升それ
 が貴嬢の誠なら此樽屋が引受て此度仲立致しませう (お
 芳)あなたのお仲立でムり升なら大方先様も御得心なさる
 でムりませうあア (久)それは今も申毛通り此事を聞した
 ら即座に大地へ両手を扣へ低頭平身三拜九拜手を叩て悦
 こぶに違ひムりませぬ (花)それでも萬一いやぢやと被仰

ツたら (久)億萬に一ツでも其様な事が有りましたら憚り
 ながら此樽屋の旨をお渡し申しませう (芳)それ程儘にお
 つしやるなら (空)それで親も安堵といふものコレお芳
 用意がよくば一寸一口 (久)イヤ其御馳走の御婚儀の晩
 までお預け申して置ませう (空)成程それで御苦勞な
 ら (久)左様なら此お菓子頂戴致して参りませうト紙の
 ま、手に取りあげ立上る此機会に饅頭一箇平舞臺へ轉
 落る久八洵くりして平舞臺へ飛で下り饅頭を拾ひ砂を吹
 くのが道具かひりの知らせチヨン此模様宜しく合方にて
 道具ふん廻す

●多助住居の場 都て長家裏手井戸傍の道具よろしく
 爰に佐助職人の拵へにて床几を雑巾にて拭て居る多助は
 井戸傍にて米を磨て居る此模様稽古唄にて道具止るト兩

人へ臺詞渡り佐助は下手へ這入爰へ以前の久八息の切れ
 しこなしにて走り出て來り (久八)チイ多助さん、
 其處に居たのか、苦しい水を一杯呑して頂戴ト捨せ
 りふにて釣瓶の口より水を呑む (多助)然うして何ぞ用で
 ろがんですか (久)用の何のと多助さん今日はお前の運の向
 き時多助さん味ひ事をするせ (多)それは一体何うした事
 でがんです (久)どうも斯うもないマア此床几へ掛なせト
 無理に手を捉て床几へかけさせ (久)時に其咄といふハソ
 レいつも休む四ツ目の茶店な (多)ハア四ツ目の茶店 (久)
 アノ後の藏の澤山ある家な (多)ハア藏のある内 (久)其處
 でコレ見なさい甘い茶をよばれた上蕎麥饅頭を此如に澤
 山貰つて來たト以前の紙包を出して饅頭を多助にやる多
 助は是を喰ひ (多)こんな旨い物の産れて初めてぢや (久)

まだ其上に酒造出さうと云ふたを婚禮の晩まで預けて來たのぢや (多)ハアン饅頭を貰ふたり酒の馳走を婚禮まで延して來るとは合點がゆかぬ其娘の所へ聲でも來るのでがんすか (久)ナニ嫁に行のサ (多)ハア然うでがんすか帯刀御免の藤野屋の娘なら其行先も指折の大家でがんせう (久)そこが實に妙な咄で嫁に行といふ先の娘の望でお前の處サ (多)お前の處とは (久)鹽原多助といふ色事師の處サと多助の脊中を叩く (多)馬鹿にさつしやるなト立腹のこなしにて立うとするを引止め (久)コレ然う怒つて仕舞おづに此久八の談を聞ト是より藤野屋の娘の一條を詳しく語り嫁に貰へど勸める多助の聞入れづ釣合ぬの不縁の基先が物持素封なら炭屋の女房に向ぬ嫁でがんすから是は何うぞ久八さん斷つて下せへやし (久)コレサ多助さん

吾們が立派に受合て宜しい仲立致しませうと首受合まで仕て來た事を夫が今更斷われやうか (多)それはお前無理でがんす誰が家業の爲にならぬそんな嫁を悦んで貰ふ馬鹿がありやすか (久)何日おれが馬鹿にした (多)ハテ馬鹿にせいぞかト兩人腕まくりして立懸る此以前上手の入り口より前幕の手代和平出か、り居て様子を立聞見兼て出て來り兩人を止め (和平)立派な大家の娘やへ羨焚の世話から小買物商ひ向にも不都合やべそれでお前多助さん斷りを言ふのであらう (多)然うでがんす (和)併しそれが出來たら何うする (多)何のそれは駄目でがんそ (和)マア然う言いないで聞なさい先がそれを得心で下女兼帯で働くのが承知であつたら貰ふ心か (多)ソリヤもう働と同じ様働く事が出來たなら (和)モシ樽屋さんお聞の通りの譯で

すが夫を承知で来ませうか (久)それは無理でムリ升 (和)
 それが出来づは無い縁と謝絶つて貰ませう (久)それでは
 困る此久八首迄渡すと受合たをト是非なき思入あつて思
 案しながら上手の入り口へ這入る (和)デモわいは云ふも
 のし獨身で何彼につけて (多)結句これが和平さんト釣
 瓶を井戸へ突込のが道具替りの知らせ〇吾氣樂でがんす
 ト水を汲み上げ米炊桶へ入れる此摸縁合方にて道具ふん
 廻す

●藤野屋茶室の場 都て以前の茶の間の道具に戻り爰
 に空右衛門お花お芳住ひ合方にて道具納まるト臺詞あつ
 て樽屋の返事を待て居る爰へ下手より久八出て来り前へ
 行兼るこなし (お芳)チ、樽屋さん最前から旦那様にもお
 儀様にむお待兼 (空)どうぞ此方へ樽屋さん (久)へい有難

うムリ升ト面目なきこなし有て二重へ上り〇先刻は出ま
 してお喧ましろムリました其節載さましたお饅頭は儘に
 お返し申升ト袂より紙包の菓子を出して戻す空右衛門合
 點の行ぬ思入あつて (空)お持歸りの饅頭を返すとは何う
 云ふ譯 (お芳)シテお話しは如何でムりました三拜九拜手
 を叩てお喜びなされましたが (久)所がねッから脱ばぬの
 でムリ升ト是を聞きお芳久八の胸ぐらを捉へ (芳)臆萬一
 にも間違うた其時の首を渡すと受合たではムんせぬかト
 手荒く久八を突飛ばす久八咽の痛むこなし有て (久)實は此
 久八も色々やり合たのでムリ升るが先の注文が注文故
 此久八でさへ出来ぬと見抜て居り升れどそれ程迄に被仰
 る事なら無駄と思つて言ひ升が先づ第一ヶ條の注文は世
 事を好して計り炭の商ひは云ふに及ばず水も汲んだり飯も

焚たり (花) ハイ致しまするわいなア (久) 其處で第二ヶ條
 が子に臥し寢に起き朝は明の七ツから晩は夜の九ツ迄働
 く事が出来ますか (花) 出来ませいでかいなア (久) 處で次
 の三ヶ條の味噌汁提げて買物に行れますか (花) ハイ参り
 まするわいなア (久) これは妙だ其所で四ヶ條は飯ですが
 彼の男は三度く挽割飯に菜は澤庵其外生味噌か鹽を嘗
 て飯を喰ねば成りませんが其辛抱は出来ますか (花) 出来
 ませいでかいなア (久) 何うも不思議だ所で次の五ヶ條は
 夫婦俱縁ぎでムリ升が亭主に負せ劣らぬ縁に働らく事が
 出来ますか (花) それは固より望む所 (空) それでは和女は
 注交通り (お) 芳皆辛抱が出来升かいなア (花) 長夫が斯う
 せいのどの扮附なら決して昔かぬ此身の覺悟下是を聞久八
 横手を拍ち (久) ろらい夫さへ聞けばモウ安心今度は大丈

夫でムリ升ト一散に下手へ走り這入る跡に三人こなし有
 て (芳) それで嬢さん貫娘縁に (空) 今の身分に引替
 (花) つらい辛抱して迄も (芳) アノ眞黒な炭屋さんの (空)
 女房に你女は成たいか (花) ハイと羞かしき思入空右衛門
 是を見て (空) お芳ト持たる烟管にて其盆の灰吹を叩くの
 が木の頭〇餘程いさ葉だなアト其を映ひ此模様宜敷合方
 にて〇拍子幕

大詰

● 塩原多助婚禮の場 都て商家店先の体爰に輕子大勢
 立悪り居る此模様明祭の鳴物にて賑やかに幕あくと皆
 ぐ拾送りふにて橋懸りへ這入る此内向ふより前幕の出口
 屋の悴善太郎手代和平出て來る此時橋懸りより前幕の吉

四八右衛門出て来り(八)チ、是は山口屋の御子息何と今
 口は多助さんもお目出度事とムリ升なア(和)實は其仲人
 に頼まれて主人の名代に若旦那と連立で参りました(八)
 夫は御苦勞にムリ升儀も日外受合た高千雨の炭荷をば今
 日送つて参り升た然し跡船の来た事を多助さんに知らし
 て置う○チイ多助さん々々と呼ぶ是にて奥より多助黒羽
 二重の着附麻上下にて出て来り三人を見て(多)是はどな
 たも有難う何うぞ奥へ通つて下せいやしト八右衛門は炭
 荷の跡船が着て今陸揚をして居るといふ臺詞あつて三人
 奥へ這入直に奥より以前の久八出て来り(久八)天窓敷も
 前ふたればお前も席に就て下さい(多)勿々婚禮どころの
 事じやない跡荷が来たので炭を揚げぬばならぬト肩衣を
 脱ぎ手拭にて鉢巻する(久)何だ跡船が来た夫は大騒だ

イ嫁御さんト呼立る是にて奥よりお花白の振袖襦形
 りお芳紋附の拵らへにて出て来り色々せりふ有てお花お
 芳褌掛け久八尻端よりにて下手より輕子が持て来る炭俵
 を四人にて上手へ運び積上る此内可笑味宜敷あつてド
 炭を積仕舞(多)どなたも御苦勞でがんした(芳)何とお積
 さんの働きはどんなものでムリ升(久)多助さんも是でハ
 言分はあるさひがな(多)ヤ在のでがんす(花)何がお氣
 に適ひませぬ悪い所は何卒被仰つて下さりませ(多)悪い
 と云ふのブラ〜とした其振袖邪魔にこそなれ役には立
 ぬ夫が第一費を知ぬといふものでがんすト是にてお花邊
 りを見廻し思入あつて有合ふ薪の割莖と鏡を持来り両袖
 を叩き切る是を見て久八お芳は胸くりなし多助は思入あ
 つて(多)おらい〇ト横手を叩くを道具替りの知らせ〇夫

多助の唄でがんと此摸家体離子にて道具ふん廻す
 ●同奥座敷の場 都而婚禮の道具を置き舞臺半廻りよ
 り祝言の謠にて道具とまるト奥より前幕の盤原角右衛門
 女房お清、和平、善太郎、多助、お花、お芳、八右衛門出て来り皆々
 坐に就き喜びの臺詞渡つて謠に成り祝言の盃事あつて
 (和平)まづ是にて婚禮の (久)其盃も住の江の (八右)松の常
 盤の色かへぬ (角)所も本所 (皆々)相生町 (お清)祝して我
 良夫御苦勞ながら (角)チ、〇相に相生の松こそ目出度か
 りけるト角右衛門は謠善太郎は舞ことあつて納まる (皆
 々)お目出度うムり升る (角)チ、目出度くト扇を開く此
 披露宜敷目出度打出し
 盤原多助經濟鑑畢

版權登錄

版權所有

明治廿三年六月廿七日印刷
全 年六月廿八日出版

定價十五錢

著作者

勝彦兵衛

大坂府東成郡西高津村六百八十九番屋敷

發行者

大淵 濤

大坂市南區末吉橋通四丁目八十六番屋敷

印刷者

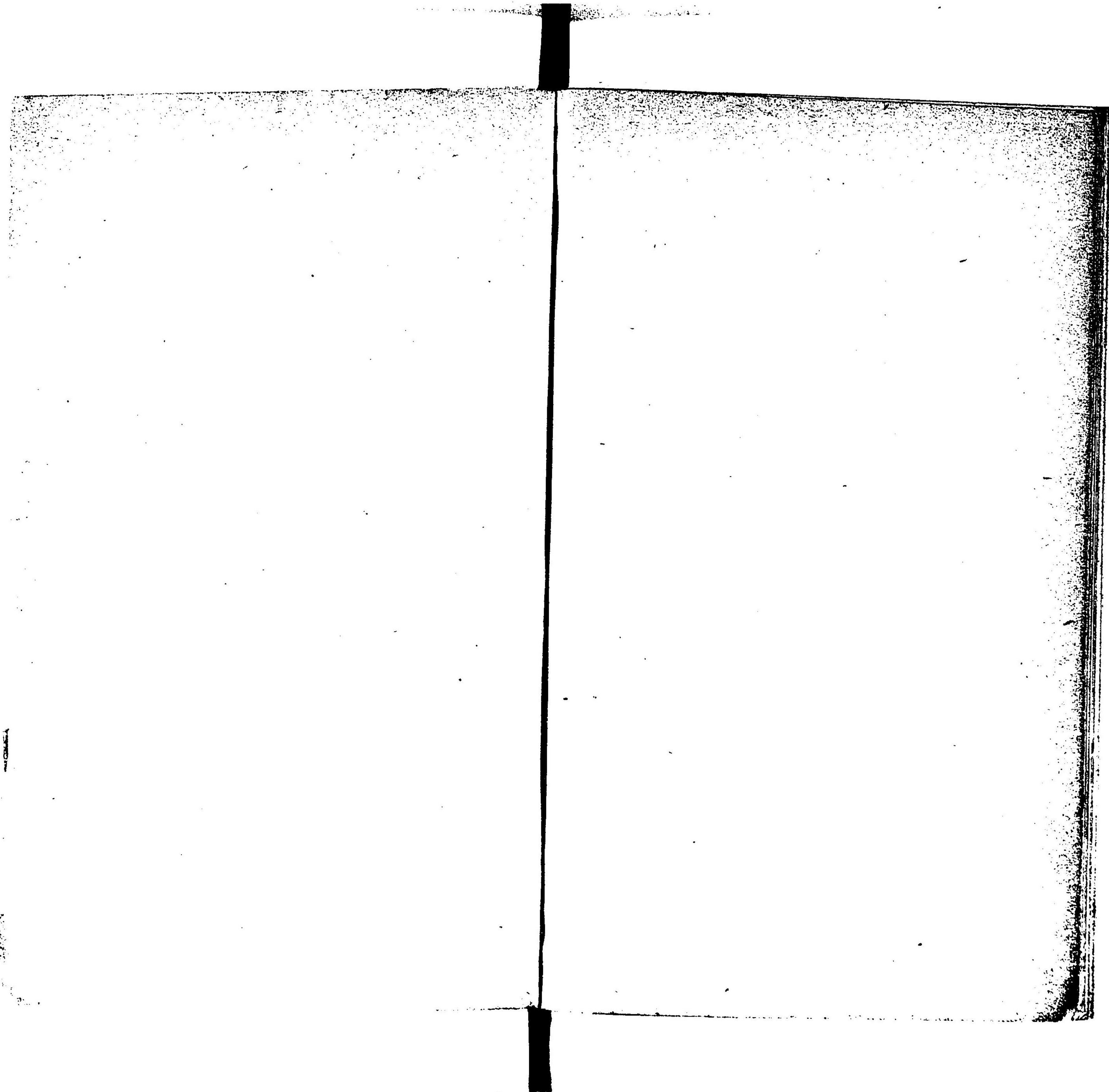
山上貞二郎

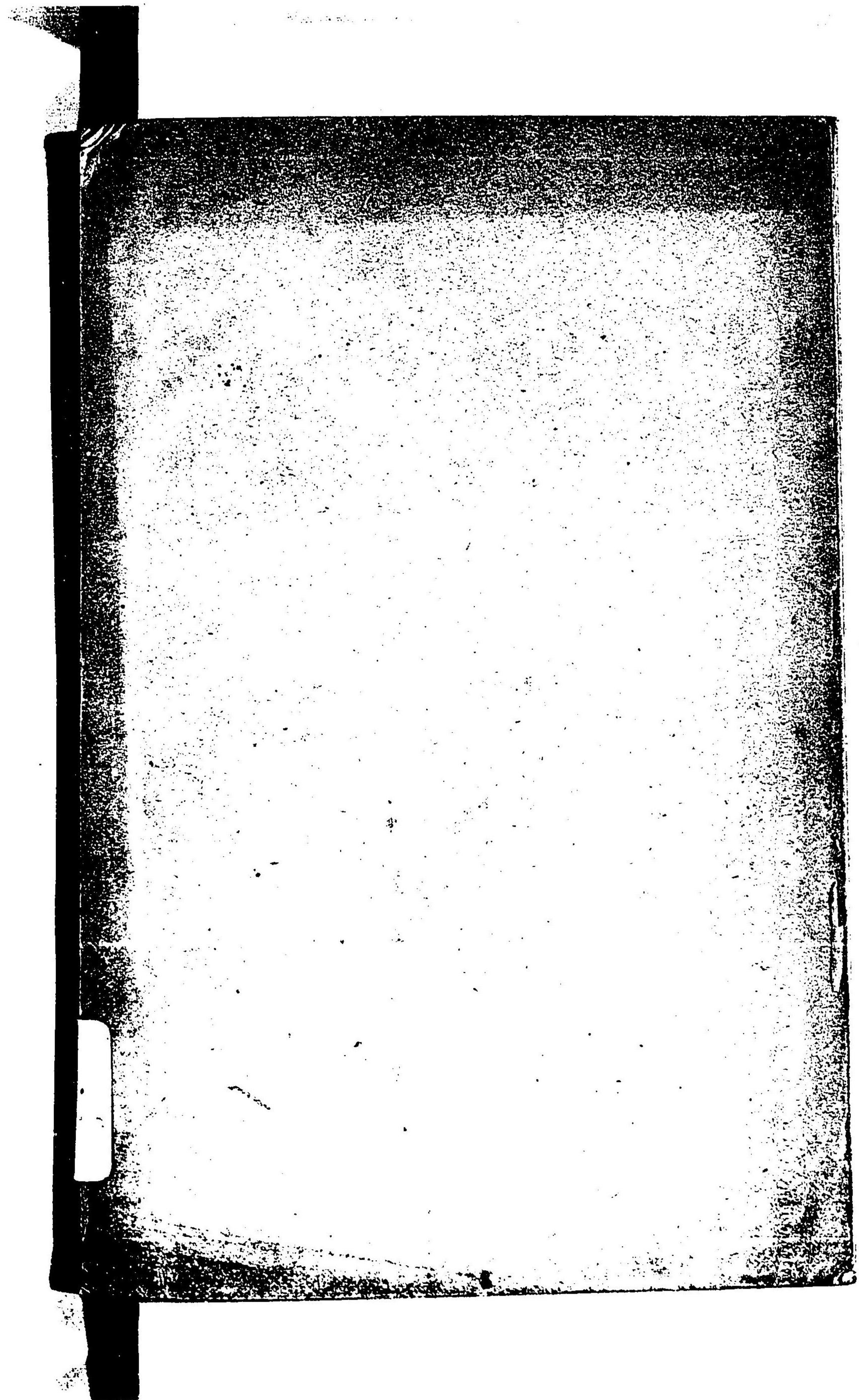
大坂市東區平野町二丁目廿四番屋敷
自由堂

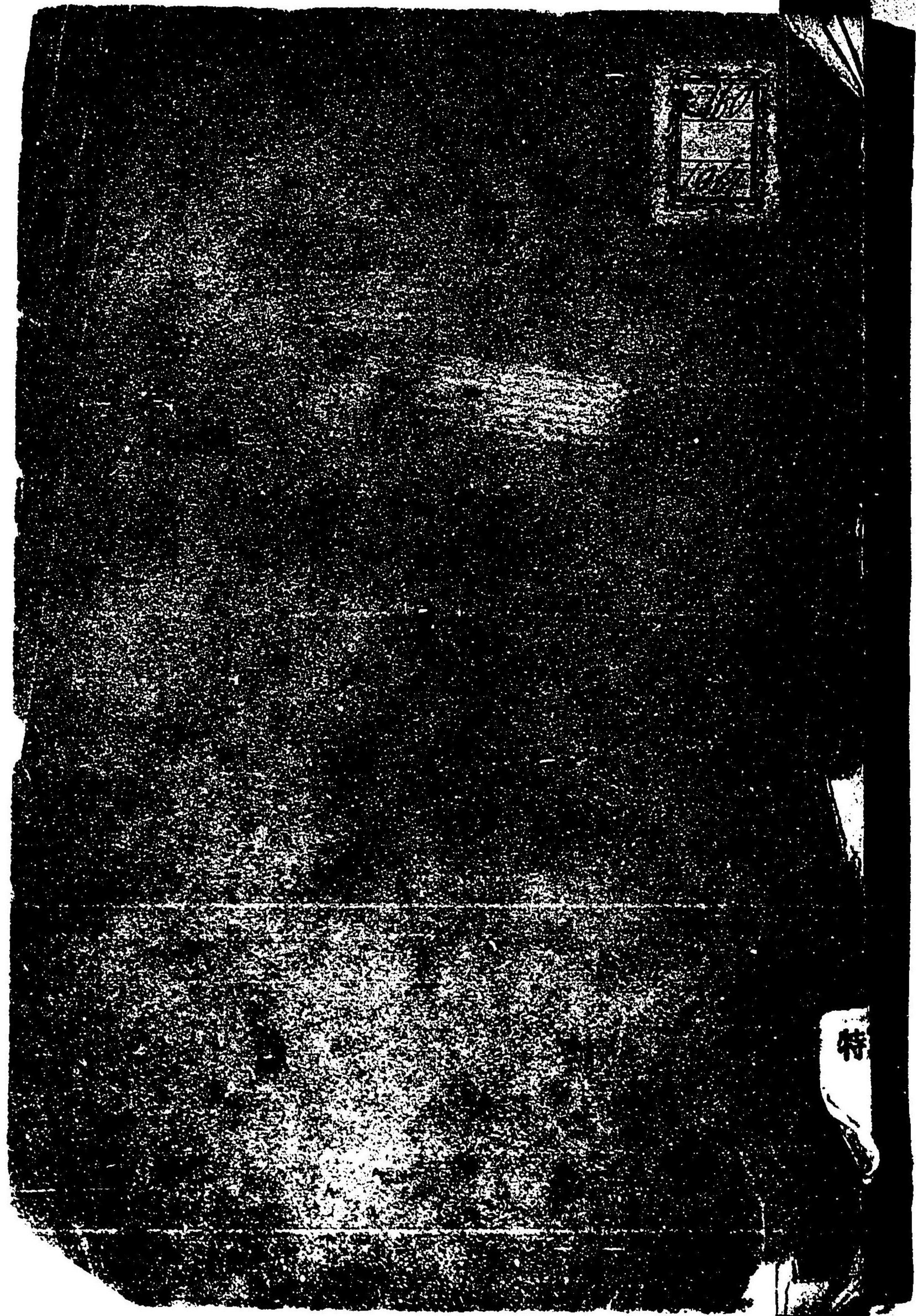
發賣所

駿々堂本店

大坂心齋橋北詰八十六番邸







特

特

088576-000-9

特13-35

塩原多助經濟鑑

勝 諺蔵/著

M23

DBJ-0235

